

日本生理学雑誌  
第86巻 特別号  
December 2024

# 日本生理学会 100周年記念



一般社団法人 日本生理学会

# 目 次

## 石川義弘理事長からのメッセージ

日本生理学会の創立 100 周年に際して（石川義弘）	1
----------------------------	---

## 祝 辞

日本生理学会と私（金子章道）	3
国民の中の生理学・生理学会（岡田泰伸）	5
日本生理学会設立 100 周年に寄せて—先輩からの教え—（栗原 敏）	7
日本生理学会 100 周年に思いを寄せて（丸中良典）	9

## 学会の歴史

略年表	11
日本生理学会史	14
日本生理学会大会記念写真一覧	35
発行誌一覧	49
歴代理事長/歴代常任幹事一覧	51
特別会員一覧	58
1965 年以降の会員数の推移	60

## 大会の記録

第 100 回日本生理学会記念大会の概要	61
生理学研究に関する京都宣言	64
日本生理学会大会一覧	66
大会参加者数と演題数の推移	75

日本生理学雑誌に掲載された内容を許可無く転載することはできません。 必ず事務局に連絡いただき、転載許可を得た上で、出典を明記してください。
--

## 石川義弘理事長からのメッセージ



## 日本生理学会の創立 100 周年に際して

日本生理学会理事長  
石川 義弘



日本生理学会が創立 100 周年を迎えた喜びを、すべての会員および関係者の皆様と共有したいと思います。3,000 人近い現会員の皆様はもちろんです。70 人に及ぶ会員歴 50 年以上の功労者の先生方にも深く御礼を申し上げます。生理学会は学会員とともに、一世紀を歩み成長してきた学会だと思います。

国際生理学連合 (IUPS) に加盟する生理学会は 60 か国以上にのぼりますが、一世紀にわたる歴史を持つ学会は、1876 年に創立された英国生理学会や、1887 年に創立されたアメリカ生理学会、2021 年に 100 周年を迎えたドイツ生理学会など握りにすぎません。この点において 1922 年に創立された日本生理学会は、世界有数の歴史を持つ生理学学会として、世界の学術界でもゆるぎない伝統を誇ります。ちなみに 1922 年という年は、2 年間にわたって全世界的に流行したスペイン風邪がようやく終息した後であり、国内では日経連が設立され、国際社会ではオスマン帝国が滅亡した年に当たります。

日本生理学会はわずか 20 名程度の生理学者によって創立されましたが、少数の研究者からスタートしたのは世界共通であり、たとえばアメリカ生理学会もわずか 28 人の生理学者によって発足しました。日本生理学会の源流は 1902 年に開催された第 1 回日本総合医学会であり、学会組織化以前には日本医学会の第 2 分科会（生理学、医化学、薬物学）として活動していました。故藤田敏彦教授の思い出によれば、大正 11 年に開催された京都での第 6 回日本医学会で、生理学会が第 2 分科会から脱皮したとあります。1922 年の京都での

分科会で、「誰から発案されたかは不明であるが、医化学、薬物学へ気兼ねすることなく生理学だけでやっていこうではないか」という呼びかけで、同年 7 月に東京大学が主催校になり、第 1 回日本生理学会大会が開催されたとあります。第 1 回大会の発表演題数はわずか 37 題でしたが、10 年後には 136 題、50 年後には 365 題、そして 2000 年以降は軒並み 1,000 題近い演題が発表されています。わずか 20 名程度だった会員も、今日では 3,000 人近い大きな学会に成長しました。

学会が発行する学術雑誌も、国内向けには会員相互の情報交流を目的とする日本生理学雑誌と、広く研究成果を世界に発表する Journal of Physiological Sciences があります。後者の源流は、1927 年に日本医学会で創刊された Japanese Journal of Medical Sciences にあり、日本生理学会による独立雑誌として刊行されたのが 1950 年の Japanese Journal of Physiology です。当初はわが国の研究者の成果を英文で発信する目的であったものが、学会の成長とともに世界中から論文投稿が集まるようになり、2006 年には Journal of Physiological Sciences と名称を変更して今日に至ります。さらに 2020 年には Springer-Nature 社の協力でオープンアクセス雑誌となり、世界中の研究者が自由に閲覧できるようになりました。インパクトファクターも長らく 1 程度でしたが、今日では European Journal of Physiology や American Journal of Physiology など欧米の一流生理学雑誌と肩を並べるまでに成長しました。

このように大きな学会として創立 100 年の円熟期を迎えた日本生理学会ですが、次の 100 年には



何が起こるのでしょうか。100年というのは一つの節目であり、これまでの単純な成長ではなく、成熟組織の抱える問題を真摯にみすえ、さらなる進化を模索する必要があります。一つの参考になるのがアメリカ生理学会です。2022年で創立135年を迎え、会員数は1万人を超える世界でも有数の医学会です。しかし、創立100年の前後には会員数は半分近くに低迷していました。当時の学会幹部が将来を強く危惧し、若手会員と一体となり、新しい方向性を模索し、実行しました。それが今日の再度の繁栄へとつながりました。

アメリカでも、1980年代に多くの大学医学部で基礎系講座の再編成が行われました。いわゆる旧来の生理学教室が統廃合されたのもこのころです。わが国でも国立大学の独立法人化を受けて、従来の生理学教室が名称や専門を変えた例が多くあり、よく似ています。アメリカ生理学会は、いわゆる大学医学部の生理学教室に所属する研究者が中心であった学会から、生理学の研究とともに教育にも従事するすべての人々に門戸を開放しました。これには薬学、獣医学、看護、歯学や医療技術、さらには理工学部の生物系を含みます。今日では、医学部の生理学講座に所属する会員よりも、それ以外の所属会員の方が大半を占めるようになっていきます。顕著なのは女性会員の増加です。現在では3割程度が女性会員であり、歴代のアメリカ生理学会会長に占める女性の割合ではさらに大きくなっています。

医学教育の重要性は言うまでもありませんが、生理学教育は医学部にとどまりません。看護や歯学や獣医学、さらには栄養や医療技術、理工学部の学生向けの講義など、需要はさらに高まっています。この流れを受けてアメリカでも、新たに会員の専門分野として生理学教育が加わりました。神経や循環、呼吸器などと並列の形で生理学教育が加わったことは生理学の基礎研究を専門としないう一般大学の生理学教員に、生理学教育を専門分

野として選ぶことによって、積極的な学会活動へ参加できる道を開きました。

日本生理学会でも生理学教育が専門分野分類に加わり、さらに日本では生理学教育の質の向上のための認証制度を開始しました。生理学のエducator制度です。これは生理学会の大会などで生理学教育のノウハウの普及を進め、わが国の生理学教育の質の向上を図ります。またエducator制度にも研究者の育成のための教育を主体とする、さらに高レベルの卓越エducator制度を開始する予定です。これにより広く生理学教育を普及する活動と、未来の生理学研究者を育成する活動を進めてまいります。

また理事会を含め管理部門の体制を再検討してはどうかという声もたくさんいただいております。理事や委員会の数も、同規模の他学会と比べると多いことは事実です。会員の皆様の意見をしっかりと公平に反映し、それを実現できる学会組織を目指してまいります。

基礎系医学会の横の協力も重要と考えます。わが国の100年を迎える学会で同じような課題をもち、さらなる進化を目指す学会との連携を進めます。2025年には日本薬理学会、日本解剖学会との3学会合同大会が開催されます。また共同で日本学術会議への提案を進めます。3つの学会はあわせて330年の歴史を持ちます。これだけの伝統を持つ3学会が合同大会を開くのは、わが国の学会の歴史でも稀有です。

日本生理学会が200年を迎えるころにはどうなっているのでしょうか。むろん私も会員の皆様もいなくなっているかもしれません。しかるに生理学の研究や教育が、わが国から廃れることはないでしょう。そのなかで日本生理学会がどのように日本の、そして世界の医学に貢献し続けることができるかを、未来の会員の皆様と考え続けたいと思います。

# 祝 辞



## 日本生理学会と私

慶應義塾大学 名誉教授  
生理学研究所 名誉教授  
金子 章道



私が日本生理学会大会に初めて参加したのは昭和38年（1963年）大阪大学医学部で開催された第40回大会でした。慶應義塾大学医学部生理学教室の富田恒男先生の研究室に入室した直後のことです。その頃の医学教育では国家試験を受験する前に1年間のインターンがありましたが、私は卒業後生理学に進むことを決めておりましたので周りからインターンをやりながら研究室へ通うことを認めていただき、毎日午後は研究室で実験に従事させていただいておりました。その結果をもってまだ本当に駆け出しのまま、学会で発表させていただいたわけです。並みいる各大学の教授たちの前での発表ですから、大変緊張したことを覚えております。その後毎年の大会で研究発表をしましたので、数年経つとだいぶ慣れてきたことを記憶しております。

1965年には慶應の生理学教室創始者であられた加藤元一先生が主宰されて第23回国際生理学連合IUPSの大会が東京で開催され、日本生理学会も全面的にこれを支援しました。当時はいまのように国際学会の運営を支援してくれるような業者はなかったので、参加者の募集、プログラムの作成、様々な会場の運営などすべてが研究者の手作りでありました。主宰校として慶應医学部生理学教室にはIUPS大会の事務局が設けられ、高垣元吉郎助教授（当時）が事務局長を務められました。大会当日は教室のメンバーは総出で運営に当たり、私自身もまだ駆け出しでしたが、第2会場の東京会館の責任者を任せられ現場での運営に駆け回ったことを覚えております。しかし、こうした仕事に時間を取られてしまったため著名な外国

参加者の講演を聴く機会を逸してしまったことが後々悔やまれました。

1968年秋から1971年1月までHarvard Medical SchoolのDH Hubel, TN Wiesel両教授のもとへ留学する機会が与えられ、2年間にわたってBostonでの研究を楽しむことができました。1971年に帰国すると国内の大学で紛争がまだ続いていて騒然としており、慶應医学部生理学教室でもその影響は決して小さくありませんでした。

その頃生理学会では、国立の生理学共同研究施設の設定を求める動きが活発になり、私も専門委員の一人として準備委員会の雑務をお手伝いする仕事に参加することになりました。既に我々の希望は1967年11月の日本学術会議において審査され、第49回日本学術会議総会において、人体基礎生理学研究所（仮称）の設立について内閣総理大臣への勧告が出されておりました。しかしその具体化に向けては様々な準備が必要でした。1975年（昭和50年）度の国家予算で調査費がついて準備が開始され、1977年5月いよいよ生理学研究所の発足となったのです。生理学会を挙げてそれまでの全員の希望が実現したことに喜び、今後の研究所に期待するところが大きかったことを記憶しております。私も1979年3月に新設された「生体情報研究部門」の責任者として赴任することとなりました。

日本生理学会において私は1987年に常任幹事に選任され、学会の運営にも携わることになりました。日本生理学会には以前から会長職という名称はなく、常任幹事のうち会長に相当する役目を果たすのが「庶務幹事」と呼ばれる方でありまし

た。庶務幹事、会計幹事、日生誌の編集委員長を務める編集幹事の3人が常任幹事会の中心を担う三役であり、当時は伊藤正男庶務幹事、本郷利憲会計幹事、酒井敏夫編集幹事のお三方であったと記憶しております。なぜ、会長職を置かなかったのか、私も詳しい説明を聞いたわけではありませんが、1983年に発行された「日本生理学教室史(上巻)」の36ページに日本生理学会発足当時の考え方について次のような記載があります。

「申し合わせによって、例年学術報告のための大会を開くことになったが、学会発足当時の気風は自由主義調が高いもので、浦本政三郎教授の近世日本生理学思想史論の一文を引用すると『従来我が生理学会の最も特徴と認められることは外見極めて自由主義的で何等の拘束なく、従って会長を定る事なく、その大会は開催校の教授をもって当番幹事とし、来会者をもって会員とし、而かも極めて活気を呈した学会の一つであった。』この気風は今日まである意味では継承されているが、この文からも窺われるように日本生理学会は、当初は有志の集まりに近かったが、運営上事務所を東大におき、橋田邦彦教授が常任幹事となった。大学などの教授が評議員となり、毎年大会時に、次回開催校の決定や諸般の事項の意見が提供された。当番幹事が決まるとあとは一切が任せられ、各大学研究所などに開催の通知その他の事務連絡が行われ、大会の抄録集が作られた。」(以下略)

恐らくこのような考え方が長く引き継がれ、会長職などが置かれなかった状態が続いていたのでしょう。しかし、IUPS Congressの招致や、薬理学会や解剖学会など他の学会と合同年次大会など共同して活動を行おうとすると、これまでの組織の体裁ではどうしてもなじまないことになり、2002年3月の評議員会・総会で会則の改正が承認されて日本生理学会には会長、副会長、日生誌編集長、大会長などの役員を置くこととなりました。私はこの年、会長に選任され、初代の会長を務めることになりました。その後、日本生理学会は「任意団体」から法人格を取得すべく組織の改編へ進むことになります。この辺の経緯は当時そうした組織改編に当たられた方にバトンタッチすることにいたしましょう。

私が現役の研究者を引退してからはや20年が経過しました。この間、大学は国公立大学の法人化など大きな変化がありましたし、研究のあり方もずいぶんと変わりました。もはや個人技と手作りの研究は不可能になり、必要とする研究費もお小遣い程度では間に合わなくなりました。また、学術雑誌も変容し出版の費用のあり方も昔とは異なります。私が現役時代を過ごした70-90年代はずいぶん昔のこととなってしまったようです。これからの生理学研究、生理学教育、そして生理学会はどのように変わっていくのでしょうか。次の世代の皆様へ課せられた大きな課題でありましょう。



## 国民の中の生理学・生理学会

生理学研究所 名誉教授  
総合研究大学院大学 名誉教授  
愛知医科大学 客員教授  
京都府立医科大学 客員教授

岡田 泰伸



生理学会の第1回大会が開催された1922年は、スペイン風邪パンデミックの最中のことであった。そして2023年3月に、第100回大会の開催がCOVID-19パンデミックの中で行われた。100年の時を得て今、生理学会に求められていることは何かを、国民目線も加えて考え直すことに意味があるかもしれないと思う次第である。

四半世紀以上前の分子生物学の隆盛の中で、生理学のあり方や存在意義が問われたことに、日本学術会議生理学研究連絡委員会（生理研連）は3年間の検討を経て1997年に“生理学の動向と展望「生命への統合」”なる報告書[1]を提出した。その報告で、生理学を生体の機能とそのメカニズムを明らかにし、その意義を解明する（“使命①”とする）学問と定義した上で、生理学の意義は医学・生命科学に重要な基礎を与える（“使命②”とする）と共に、自然と生命の摂理に沿った人類生活の実現への指針を与える（“使命③”とする）ものであるとしている。これらの提言は今でも至言であると私たちは思っているが、果たして生理学関係者でない方々にとってはいかがであろうか？特にこのパンデミックを経験した今、国民にとって生理学や生理学会が益々馴染みのないものになってはいないだろうか？

大多数の生理学者は、私も含めて、使命①に専念することが自動的に使命②、③につながるものと思ってきた。しかし、今齢を重ねてみると、特に今でも時折COVID-19患者クラスターが発生している介護老人保健施設にも勤務していると、こ

れは独りよがりであったと思い知らされている。もちろん①なしに②、③はあり得ないし、特に若手研究者は大いに①に専念すべきであるだろう。であるなら、シニア研究者が中心となって学会活動として②と③を射程に置いた取り組みもして、それを大会プログラムの一部に加えていき、せめて年に一度位は②と③の使命を若手研究者も交えて胸に叩き込む場を持つことが望ましいのではないだろうか。これによって、使命①へのモチベーションが更に高まり、グラント申請書作成にもメリットがもたらされるように思われる。更には、他の医学関係学会との連携も強まることになるに違いない。最近つくづく思い知らされていることは、生理的（正常）状態から病的状態（病態）への連続性であり、病態は生理的反応・応答過程の変調から始まり、ついには生理的過程がそのまま病理的過程に乗っ取られるということである。生理学が真に人々の（カラダとココロの）健康な生活の維持と疾病の予防に役立つ指針を与えるものとなるためには、その観点から議論する場を持つ必要がある。そのためのセッションを大会ごとに一つずつ設けて、時には他学会から講演者を招いて、生理学会員が議論して考究するようにしていくのはどうだろう。例えば、一つ一つの疾病や体調変異に関して、時に臨床医学者も招きながら、どの病態や体調不良にどのような生理学的過程とその変調が働いているかについて意見を交えて議論する場である。そしてそれに向けて、大会までにある程度議論をしておく場（研究討論会）を何

回か持てるとよい。そのような場合は、昔は科研費の「総合研究 A」に申請してそのサポートを受けることができたが、現在はそのための科研費種目は残念ながら存在しない。でも、生理学研究所の「研究会」の形でサポートを得ることは可能なのではなかろうか。また、そのような研究討論会は各地方会でも開催の機会が持てるかもしれない。

生理学・生理学会が病態への連続性を射程に入れることによって、国民の健康生活への指針を与えるものとなるだろう。また、医学教育、看護・介護・養護学などのコメディカル教育、歯・薬・獣医学などの医学関連学教育、栄養・運動・体育学などの健康科学教育、更には小・中・高等学校教育への生理学の寄与がより鮮明なものとなり得るだろう。インターネットやテレビ（特に民放やBS）のコマーシャル等を介するフェイク情報があふれる現在、このように混沌としたるつぽから正しい情報を取捨選択する際の武器となる基本情報もこうした生理学教育に求められるだろう。「数ある情報の真偽を見極める」のは「生理学的な考え方、特にメカニズムを重視する考え方を習得していない」との森本恵子先生のご指摘 [2] の通りだと思う。

教育への生理学会の取り組みはこれまでの「教育委員会」の主導によって、大会でのモデル講義の実施、「一步一步学ぶ生命科学」[3] の作成・監修、そして「生理学エデュケーター制度」[4] の導入・定着など、目覚ましいものがあった。そのような機運の上で、生理学知識の国民へのすばらしい発信が最近いくつか個別的に行われるようになった（例えば [5-13]）。今後そのような国民の健康に有益な生理学情報発信が、もっと系統的な形で（できれば学会内に「刊行委員会」のようなものを発足させて、その編集のもとに）行われ、日本生理学会の名が（せめて“はじめに”や“あとがき”に）明記される形で刊行されるようになれば、生理学や生理学会が小・中・高校教員や国

民に身近なものとなるだろう。こうして生理学的知識を広く国民の健康維持と疾病予防に役立てていただくことができるようになれば、生理学が人々の生活に生かされる学問、すなわち能勢博先生のおっしゃる「健康な人をより健康にするという“前向き”の医学」[14] となると共に、人々の健康寿命の延長に役立ち、医療費の削減にも貢献するものともなることだろう。

## 文 献

1. 日本学術会議生理学研究連絡委員会：生理学の動向と展望「生命への統合」. 1997 : <https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/16pdf/1651.pdf>
2. 森本恵子：生理学教育について思う事. 日本生理学雑誌 **83** : 78-80, 2021
3. 渋谷まさと：「一步一步学ぶ生命科学（人体）」：基礎がわかっていない学生を自習で減らす新教材. 日本生理学雑誌 **73** : 98-100, 2011 : <http://life-science-edu.net/>
4. 鯉淵典之、中島 昭：生理学エデュケーター制度のご案内. 日本生理学雑誌 **75** : 137-139 : <http://physiology.jp/education/educator/>
5. 大橋俊夫、河合佳子：生きているしくみがわかる生理学, 医学書院, 2016
6. 挟間章博：なぜからはじまる体の科学「見る」編, 保育社, 2020
7. 鯉淵典之：なぜからはじまる体の科学「食べる・出す」編, 保育社, 2020
8. 挟間章博、垣野内景：なぜからはじまる体の科学「聞く・話す」編, 保育社, 2020
9. 大橋俊夫：リンパのふしぎー未病の仕組みを解き明かす, ちくま新書, 2021
10. 八木田和弘：「なんとなく不調」から抜け出す！「2つの体内時計」の秘密, 青春出版社, 2021
11. 鯉淵典之：なぜからはじまる体の科学「成長する」編, 保育社, 2021
12. 加藤総夫：なぜからはじまる体の科学「感じる・考える」編, 保育社, 2022
13. 和気秀文：なぜからはじまる体の科学「動く」編, 保育社, 2022
14. 能勢 博：健康長寿社会構築に向けて：運動生理学の挑戦. 日本生理学雑誌 **68** : 193-194, 2006

## 日本生理学会設立 100 周年に寄せて —先輩からの教え—

東京慈恵会医科大学 名誉教授  
栗原 敏



日本生理学会は2022年に設立100周年を迎えられ、心からお祝い申し上げます。

私は1965年（昭和40年）に東京慈恵会医科大学に入学し、1967年（昭和42年）に初めて生理学の講義を聴きました。当時、生理学講座は二講座制で、第一生理学講座は名取禮二教授が主宰され動物性機能を担当し、第二生理学講座は酒井敏夫教授が主宰され植物機能を担当されていました。酒井教授は学生の面倒見がよく、多くの学生が教室に出入りしており、私もその一人でした。酒井教授は教室の先生方と学生が昼食を共にする昼食会を計画して下さり、多くの学生は昼食会に出席して、先生方と食事を摂りながらひと時を過ごしたことを懐かしく思い出します。私は酒井先生に惹かれるところがあり、学生時代から第二生理学教室の一隅で実験させて頂き、筋が収縮する生命現象に興味を持ちました。好きなことをやりたいという一心で、卒業後は第二生理学教室の助手として、酒井先生に採用して頂きました。

第一生理学教室は名取禮二教授が担当されており、先生は講義ノートを作らず、講義の前に教科書の項目にだけ目を通して講義をされていました。また、重要なことは板書をされていました。今、当時の先生の講義を振り返ると、筋生理学の最新の知見が語られていたことに驚きます。先生の講義は細かな知識を語るというより、その知見が出てきた経緯や、生命の仕組みなどについて話されていました。今なら、パワーポイントを使って生理学の知識を話すと思いますが、先生は講義する内容を全て頭に入れてからご自分の言葉で話されていたのです。

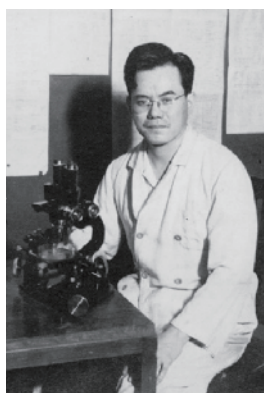
あるとき、先生は“全機性”と板書されました。何のことかすぐには理解できませんでした。先生は東京大学生理学教授であった橋田邦彦先生について話されました。橋田邦彦教授は、医学生から“生きているということはどういうことか”と質問され答えに窮し、生理学の講義をするものが、生理学の根本である生命とは何かが分からないようでは講義する資格がないと考えられ、道元禅師の教えを深く研究するようになったのです。

橋田先生は、生きているということは体の機能を担っている全ての組織や細胞などが、最大限に機能を発揮して、お互いに協力し合っていて、それが全機性だということに気づきました。また、先生は医のシステムは、医学、医術、医道から成り立っていて、医学と医術を医道が繋いでいて、医道こそ最も重要だと考えられたようです。

橋田邦彦先生は道元禅師の研究者として、生命の在り方を深く洞察され、その卓越した生命観と指導力で、世界的な生理学者をはじめ科学者を多数育成されました。日本生理学会でも活躍され運営にも参画されました。先生は請われて近衛、東條内閣の文部科学大臣に就任されましたが、それが先生の命を絶つことになったのです。

名取先生、酒井先生などの講義で、生理学は生体の個々の機能を研究するだけでなく、統合された生体機能を考えることが重要であることを学びました。生体の個々の機能の上に成り立っている生命とは何かを考えることを先輩諸教授から学び、生理学（生命の理、Logic of Life）的な考え方の重要性を学んだことは、かけがえのない経験でした。また、生理学が生命基礎科学の基幹であ





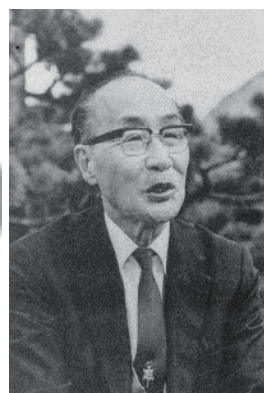
名取禮二



酒井敏夫



橋田邦彦



西丸和義

ることを実感させられました。

生命科学は日進月歩で、多くの生命科学者によって研究が進められている中で、それぞれの研究対象から成り立っている生命とは何かという問いを持ち続けることは大切なことではないかと思うようになったのです。生理学を学び研究した先人は、個々の研究の上に成り立っている生命の在り方に対する深い洞察をしてこられたと思います。現在、研究手法は進歩し、様々な知見が明らかにされ発表され、競い合っていますが、常に、自分がやっている研究の意義を考え続けることは重要で、日本生理学会の会員にはその視点を持ち続けて欲しいと願っています。

私が生理学者の道を歩もうかどうか、大学の卒業を前に迷っていた時、酒井敏夫先生に連れられて、慈恵医大の大先輩である西丸和義先生（大正10年卒）のご自宅（呉）の庭に建てられていた東京慈恵会脈管学研究所を訪れる機会があり、西丸和義先生にお目にかかりました。西丸先生は、Cambridge大学のBarcroft教授の下で脈管学の研究に従事され、帰国後、ほとんど実験装置がな

いところから、同志と共に研究室を立ち上げて研究活動を始め、後に、日本脈管学会を創立されました。西丸先生は日本生理学会の創設期に、学会活動にも尽力されました。先生から、“出来ないのではない、やろうとしないのだ”、“自らに求めれば釈然たり”など、西丸哲学を教えられ、勇気づけられました。

私は日本生理学会に出席するたびに、高名な他大学の教授に直接お目にかかり、質問していたことを思い出します。どの教授も真摯に向き合って下さいました。西丸先生から、“**生理学会員はみな平等、特別扱いをしない**”という原則があることを教えられました。日本生理学会が、他の多くの学会とは趣が異なるのは、このような諸先輩の学会創立の基本的な姿勢があったからだと感じています。他の学会では「会長」という役職を置いていたのに対して、日本生理学会では長らく「代表幹事」という名称にしていたのも、このような姿勢の表れでした。現在は、理事長という名称になりましたが、これからも開かれた日本生理学会であり続けて欲しいと願っています。



## 日本生理学会 100 周年に思いを寄せて

日本生理学会 特別会員/前理事長（前会長）  
京都府立医科大学 名誉教授  
丸中 良典



1922 年 7 月 10 日に第 1 回日本生理学会大会が開催されてから 100 年の歳月が経ち、第 100 回記念大会も 2023 年 3 月 14 日～16 日に京都国際会館にて多くの参加者を迎えて成功裏に開催されたこと、会員として非常に喜ばしく思っています。私事も含めて記載させて頂くこと誠に恐縮ですが、日本生理学会への思いを少し述べさせて頂きます。

私は京都府立医科大学医学部の学生時代から亘弘教授および後任の森本武利教授が主宰されていた第一生理学教室に自らのデスクを頂き、かつ第二生理学教室の北里宏講師（後の滋賀医科大学教授）・村山公一学内講師（後の滋賀医科大学助教授）の指導も受けて実験を行っていました。京都府立医科大学卒業後、直ちに京都府立医科大学の卒業生で滋賀医科大学に異動されていた北里宏教授のもとで助手として生理学の研究を本格的に開始しました。私自身、日本生理学会大会で研究発表を行ったのが日本生理学会神戸大会でした。本来の発表者である北里宏教授の都合で発表数時間前に急遽私が発表しなければならない状況となりました。まあ、何とか無事（？）発表を終えたところ、当時京都大学医学部生理学教室の教授を務めておられた井上章先生から北里宏教授を通じて私の発表に関してのお褒めの言葉を頂きました。この時の発表のことは今でもまざまざと脳裏に浮かんできます。今から思えばサイエンスの中での位置付けとしては取るに足らないことかもしれませんが、研究の第一歩を踏み出した駆け出しのまだ研究者とも言えない者にとっては非常に重要な出来事でした。それ以来すでに 40 年以上の歳月が過ぎ、この間の研究生生活を振り返った時、今に到

るまでの研究に対するモチベーションを形成する大きな原動力にもなったと思っています。私自身の 40 年以上におよぶ研究生生活は、日本生理学会とともに歩んできた 40 年でもあります。アメリカ・カナダでの 14 年間、特にトロント大学小児病院研究所で自らの研究室を主宰するに至ったカナダ滞在時は、日本生理学会大会に概ね参加し研究成果発表をしてきました。私にとって、日本生理学会での活動は正しく生理学研究そのものであり、現在もその位置付けは全く変わっていません。

上述のように日本生理学会は 1922 年 7 月 10 日に第 1 回大会を東京にて開催されたことに基いて 7 月 10 日を「生理学の日」として登録させて頂きました。100 年前の 1922 年に記念すべき第 1 回大会を企画され、かつ参加された生理学研究の大先輩の方々がどのような思いをお持ちになられていたのかは今となっては知るすべもありませんが、生理学の真髄を探求するという同じ目標を持った同志が一堂に会する喜びを享受されていたのではないかとと思っています。全くレベルは違いますが、私が参加し急遽発表の機会を得た神戸大会にて私が抱いた生理学探求への思いと本質的には同じではないかと不遜な思いを抱いています。

日本生理学会の 100 年の歩みの中で、私自身は後半の 40 有余年の歳月を共に歩ませて頂き、生理学研究の中で見出された新たな概念構築を自らの成長の糧にすることができたのではないかとと思っています。滋賀医科大学在職中、自らの科研費の奨励研究 4 年分をつぎ込んで揃えた実験機器を用いて独学で習得したパッチクランプ法により単一チャネル電流記録に成功した時の興奮は

私の研究人生の中でも未だ冷めやらぬ格別の思い出となっています。さらには、2年の予定で米国へと旅立ち、結果として予想だにできない展開となった14年間の北米生活、さらにはカナダ最高峰の大学でありかつ世界3大小児病院でもあるトロント大学小児病院研究所（Hospital for Sick Children Research Institute）で日本人として初の研究室開設（Principal Investigator）、母校の教授就任と数々の経験をさせて頂けたことも、日本生理学会のお陰と感謝しています。

日本生理学会におきましては、2016年～2020年の4年間、理事長・会長として、微力ながら日本生理学会の発展に尽力させて頂きました。その間、第9回アジア・オセアニア生理学会連合2019年大会（FAOPS2019）が生理学研究所の鍋倉淳一教授（現生理学研究所長）を会長として2019年3月28日～31日神戸国際会議場にて日本生理学会主催のもと開催されました。同時に第96回日本生理学会大会が同じく生理学研究所の富永真琴教授を大会長として開催されました。1,479という多くの演題発表がなされ、成功裏に幕を閉じました。また、2009年7月27日～8月1日京都国際会館にて国際生理科学連合第36回世界大会（IUPS2009）が東京大学の宮下保司教授（現東京大学名誉教授/理化学研究所脳神経科学研究センター特別顧問）を大会長として開催され、第86回日本生理学会大会を私が大会長としてIUPS2009と同時開催させて頂きました（写真はIUPS2009シンポジウム関係者および日本生理学会「細胞と分子生理の集い・上皮膜研究合同グループディナー」における集合写真）。国際学会との同時開催ということで、発表演題数は、3,177にもおよび成功裏に大会を開催することができました。東京大学の永井潜教授と橋田邦彦教授が当番幹事として1922年（大正11年）7月10日～11日東京大学にて開催されました第1回日本生理学会大会では発表演題数は37でした。1980年代前半で日本生理学会大会の発表演題数は500を超え、1990年代には900を超えました。京都の地で開催されました京都大学伊佐正教授を



大会長として開催された第100回日本生理学会記念大会では、1,000を超える発表がなされ、100年間の時を経て、発表演題数が約30倍にも増えました。これもひとえに日本生理学会の会員一人一人の学問への真摯な思いの結実だと確信しています。

この100年間の日本生理学会の発展を基盤に先人が築き上げた学問基盤をさらに発展させるのが次の100年間かと存じます。自然科学分野では先人が築き上げた成果の上に人々がさらなる発見を積み重ね、指数関数的にその知識と概念構築がなされてきています。言わば生理学研究者一人一人の個体発生を基盤に生理学の学問としての系統発生が構築された100年であり、次の100年においても弛みのない日本生理学会員一人一人の新たな発見への探究心をもって、生理学の学問の発展がなされるものと思います。日本生理学会が益々の発展を遂げられることを祈念し、日本生理学会100周年記念誌への寄稿文とさせていただきます。

# 学会の歴史



## 略年表

西 暦	和 暦	事 項
1902	明治 35	第 1 回日本連合医学会 第 2 部（生理学及び医化学）で日本最初の生理学会発表が実施
1914	大正 3	第 4 回日本医学会 日本医学会第 2 分科会が生理学，生化学，薬物学に
1922	大正 11	第 6 回日本医学会（京都）生理学独自の学会開催を決定 第 1 回日本生理学会大会 東京大学・医学部で開催
1923	大正 12	第 2 回日本生理学会大会 不減衰伝導学説の提唱（加藤元一）
1926	大正 15	第 13 回 IUPS 世界大会 ストックホルム・加藤元一による不減衰伝導デモンストレーション 第 7 回日本医学会総会 生理学が独立して第 2 分科会に
1934	昭和 9	学会会則制定
1935	昭和 10	会員制度，3 幹事制の制定
1936	昭和 11	大日本生理学雑誌発刊
1938	昭和 13	生理学学術語彙の出版（大日本生理学雑誌第 3 巻附録）
1939	昭和 14	東京談話会が学会の公式行事となる
1942	昭和 17	橋田邦彦，幹事を退任 学会設立 20 周年 全発表演題・演者，各講座・研究室業績目録の出版（日本生理学評論第 1 巻）
1944	昭和 19	第 23 回大会（仙台）の中止 大日本生理学雑誌休刊
1946	昭和 21	第 23 回大会（仙台）開催 大日本生理学雑誌が日本生理学雑誌と名称変更の上復刊 学会組織の改革，常任幹事数増員 生理学東京談話会の再開
1948	昭和 23	日本生理学会に名称変更
1949	昭和 24	生理学札幌談話会，中国四国談話会，生理学九州談話会設立
1950	昭和 25	近畿生理学談話会，生理学中部談話会設立 The Japanese Journal of Physiology 創刊 日本生理学会編集生理学講座刊行開始（中山書店）
1951	昭和 26	日本生理科学連合設置
1952	昭和 27	代議員制（地方枠）制定
1953	昭和 28	特別会員の推挙開始
1954	昭和 29	地方幹事枠の新設，代議員制廃止
1958	昭和 33	生理学振興，学生実習改善に関する委員会設置（委員会活動の開始） 日本生理学雑誌 20 巻完結記念号出版
1965	昭和 40	第 23 回 IUPS 世界大会開催（会長・加藤元一） Japanese Physiology, Present and Past 発行



西 暦	和 暦	事 項
1967	昭和 42	生理学研究所設立案の上程 生理学大系の刊行開始
1970	昭和 45	The Japanese Journal of Physiology 日本生理学会事業に
1972	昭和 47	生理学用語集出版
1973	昭和 48	日本生理学会 50 回記念大会開催 日本生理学会 50 周年記念号（日生誌 35 巻 12 号）
1977	昭和 52	生理学研究所創設 生理学実習書出版（南江堂）
1979	昭和 54	名誉会員制度設立 大会抄録の英語記載開始（日生誌）
1982	昭和 57	臨時会費制度による非会員大会発表制度の成立
1983	昭和 58	日本生理学教室史上巻出版
1986	昭和 61	Asian and Oceanian Physiological Societies (AOPS) 大会開催（バンコク） 新生理学大系刊行開始
1988	昭和 63	日本生理学教室史下巻出版
1989	昭和 64	FAOPS 設立，伊藤正男が President 就任
1991	平成 3	新生理学実習書出版（南江堂）
1993	平成 5	JJP 優秀論文賞創設
1997	平成 9	生理学用語集改訂第 5 版出版
1999	平成 11	生物科学連合への加盟
2000	平成 12	The Japanese Journal of Physiology 刊行 50 周年，Past, Present, and Future of the JJP
2001	平成 13	常任幹事任期制導入 生理学論文表題集刊行終了
2002	平成 14	会長制度の導入（金子章道会長），特別幹事常任幹事の導入
2003	平成 15	日本薬理学会年会と大会の同一会場同一開催 日本生理学雑誌の邦文原著及び短報掲載を終了
2005	平成 17	金子章道 IUPS President に就任 岡田泰伸 会長に就任 The Japanese Journal of Physiology 終刊
2006	平成 18	The Journal of Physiological Sciences 発刊（Medical Tribune 社発行） 有限責任法人日本生理学会設立 岡田泰伸 FAOPS President に選出
2008	平成 20	The Journal of Physiological Sciences 出版社の変更（Springer 社）
2009	平成 21	第 36 回 IUPS 開催（会長 宮下保司）
2010	平成 22	一般社団法人日本生理学会設立（会長 岡田泰伸） 基礎医学教育・研究の活性化に対する要望書を文部科学省及び民主党に提出（基礎系 4 学会）
2011	平成 23	第 116 回日本解剖学会総会・全国学術集会との合同で第 88 回大会開催（東日本大震災により誌上開催） 電子投票による役員選挙開始

西 暦	和 暦	事 項
2012	平成 24	栗原 敏 理事長に就任 会長, 副会長, 幹事の名称を理事長, 副理事長, 理事に変更 事務局が東京都文京区本郷から東京都新宿区信濃町に移転
2013	平成 25	旧事務所保存資料の外部委託開始 (三菱倉庫)
2014	平成 26	生理学エデュケーター認定制度の開始
2015	平成 27	第 120 回日本解剖学会総会・全国学術集会との合同で第 92 回大会開催
2016	平成 28	丸中良典 理事長に就任
2018	平成 30	The Journal of Physiological Sciences の冊子体印刷終了
2019	平成 31	第 9 回 FAOPS 大会の開催 (会長 鍋倉淳一) 「日本生理学会」を商標登録
2020	令和 2	石川義弘 理事長に就任 第 97 回日本生理学会大会誌上開催 (新型コロナウイルス感染防止のため) The Journal of Physiological Sciences オープンアクセスジャーナル化
2021	令和 3	第 98 回日本生理学会大会オンライン開催 (新型コロナウイルス感染防止のため)
2022	令和 4	第 99 回日本生理学会大会対面・オンラインハイブリッド開催 (新型コロナウイルス感染防止のため) 生理学の日の制定
2023	令和 5	第 100 回日本生理学会記念大会開催

## 日本生理学会史

### ▶前史

1902（明治35）年4月、東京で開催された第1回日本連合医学会（第3回以降日本医学会）第2部（生理学および医化学）として隈川宗雄部長（東京帝国大学医化学講座教授）の下、2題の学術講演が行われたことが、日本の生理学分野における学会発表の嚆矢とされる。その後、4年に1回行われた日本医学会総会時に、生理学者が参加・発表を行っていた（内山孝一、日本生理学雑誌 35：761）。第4回日本医学会が行われた1914（大正3）年4月に第2分科会は生理学、医化学、薬物学となり演題も20を数えた。1918（大正7）年から始まる医学部・医科大学の昇格および新設に伴う多くの生理学講座の設置は専門の学会結成の機運を高め、1922（大正11）年第6回京都大会では森島庫太第2分科会会長の下、出題63、供覧1を数えた。そして、日本医学会に参加した生理学関係者の衆議一決により、生理学独自の学会開催が定まった（「京都の分科会の機会に急転歩で生理学会が生まれた。誰から発案せられたかは忘れたが、医化学、薬物学に気兼ねすることなく生理学だけでやっていこうではないか、ということで瞬く間に衆議一決、思い立ったが吉日善は急げで、早速その同じ大正11年の7月に第1回を東京で開くことになった」；藤田敏彦、日本生理学雑誌）。

### 学会設立

同年7月10、11日に東京帝国大学医学部生理学教室にて第1回大日本生理学会を開催、37題の発表が行われた。以後、第二次世界大戦末期を除き年一回、大会が開催されている。当初から学会は、「従来我が生理学会の最も特徴と認められることは外見極めて自由主義的で何等の拘束なく、したがって会長を定むる事なく、その大会は開催校の教授をもって当番幹事とし、来会者をもって会員とし、而も極めて活気を呈した」（浦本政三郎、近

世日本生理学思想史論）という気風であった。実際、発表内容も呼吸生理、刺激生理、心臓生理、発汗生理、電気生理のみならず、栄養問題についての報告もあった。この第1回大会では、日本生理学の建設者である大沢謙二も演者として「ゴンズイの針について」を発表している。第2回大会は福岡市で行われ、この時、加藤元一により「不減衰伝導学説」が提唱された。

「慶應大学医学部生理学の加藤元一先生による不減衰伝導説についての口演が終了した時、間髪を入れずに質問討議に立ったのは京都帝国大学医学部生理学教授、石川日出鶴丸先生であった。いわく、『今の加藤教授の結論をすべて反駁してみせる。私に20分いただきたい』。そのとき座長は『プログラムの進行にそのような時間の余裕はない。反駁は大変興味があるので来年の学会に持ち越しては』と宣言した。こうして始まったのが、慶應大による『不減衰伝導説』と京都大の『減衰伝導説』に関する神経生理学の一大論争であり、この論争はその後1932年まで継続した」（大村 裕、我が国の神経生理学の黎明期：日本生理学雑誌 71：44, 2007）。加藤元一はその後1926（大正15）年にスウェーデン、Stockholmで開催されたThe 13th World Congress of The International Union of Physiological Sciences（第13回IUPS世界大会）に際して、不減衰伝導説のデモンストレーションを行った。

学会運営は、当初は有志の集まりに近かったが、運営上事務所を東京帝国大学内に置き、橋田邦彦が常任幹事になった。また、大学主任教授が評議員となり、毎年大会時に次回開催校決定等が行われ、当番会長が大会事務を行ってきた。そして1926（大正15）年第7回日本医学会総会においても独立して第2分科会（第9回総会以降は第3分科会）となった。

1931（昭和6）年の第10回大会では、減衰・不

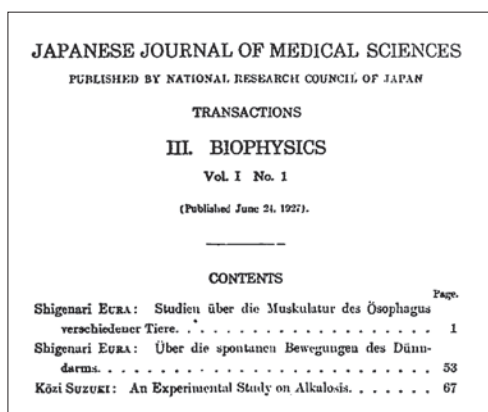


図 1. Japanese Journal of Medical Sciences, Biophysics

減衰伝導論争に対して橋田邦彦は単一神経線維による記録の要を指摘し、それが加藤元一らによる単一神経線維分離と興奮性の記録に繋がった。

当初、大会は当番会長が事務連絡等の一切を行ってきたが、1925（大正 14）年第 4 回大会（満洲医大）では演題数が 100 を超え、1933（昭和 8）年 12 回金沢大会では 200 題に達した。このような演題数の爆発的増加に伴う事務量増への対応として、1934（昭和 9）年の第 13 回東京大会以来、会則を定める会員制学会へと移行した。翌 1935（昭和 10）年第 14 回京城大会時の評議員会において具体的に会則策定、会員制度、3 常任幹事制（橋田邦彦東京帝大教授、浦本政三郎慈恵医大教授、戸塚武彦日本医大教授）が定められた。しかし、「それによって従来の形態が変わったのではなく、依然として会長は開催校の当番幹事に依って代行させられる方式であり、他の多くの学会に於ける如き、宿題報告の如きものは行われない。（中略）然し乍らこれらの形態は或る点に於て日本生理学の学風の片影を指示して居ることに間違いはない」（名取礼二、日本生理学会の沿革、1965）と学会の自由主義的気風は受け継がれていった。機関誌については、使用言語を欧文もしくは和文にするか、生理学術語統一の課題も絡めて広く議論がなされ、当初は学会誌の発行は行われなかった。ただし、1926（大正 15）年に発刊された東京帝国大

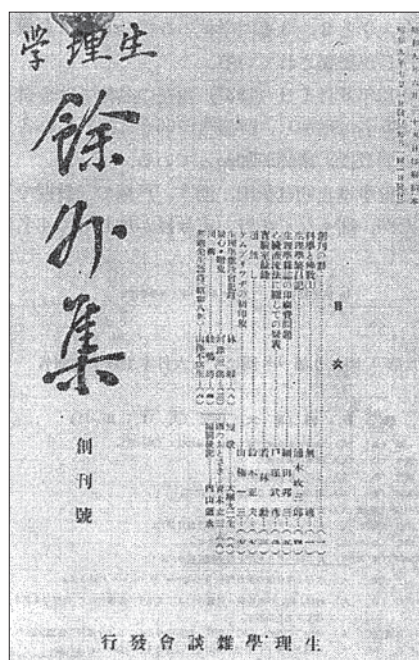


図 2. 生理学餘外集

学・橋田教授編纂の Journal of Biophysics（全 2 巻）が、その後は学術会議編集の Japanese Journal of Medical Sciences, Biophysics（図 1）が学会発表要旨を掲載という準機関誌的な役割を担った。また、学会機関誌の早期発刊を望む有志（生理学雑誌会）によって作成された和文誌・生理学餘外集が 1934（昭和 9）年発刊され（図 2）、学会機関誌刊行の機運が高まった。そして上記第 14 回大会における評議員会にて機関誌発行が承認された。編集、発行は橋田、浦本、戸塚の三常任幹事に委託され、機関誌である大日本生理学雑誌（後に日本生理学雑誌と改称）（月刊）が翌 1936（昭和 11）年に戸塚幹事を編集幹事として発刊、三秀舎から発行された（図 3）。第 1 巻は 298 ページ、原著 38、抄録 53、他に会報等が掲載された。戸塚幹事は 1963（昭和 38）年第 26 巻まで編集主幹を務めた。同年、常任幹事に新たに名古屋帝国大学教授の久野 寧が加わった。

1935（昭和 10）年には当時のソビエト社会主義共和国連邦（現在のロシア連邦）Leningrad-Moscow にて第 15 回 IUPS 世界大会が開催され





図3. 日本生理學雜誌

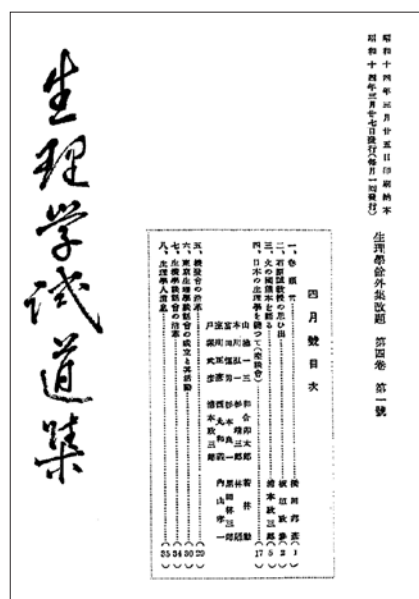


図4. 生理学試道集

た。それに際して加藤元一教授は、President の Ivan Pavloff 博士から正賓として招待され、日本からガマガエルを170匹輸送し、参加者の前で単一神経線維の剖出および全か無かの法則の実験を供覧した（古川 元，日本医史学雑誌 36：55, 1989）。この時実施された総会において久野 寧が国際生理科学連合（IUPS）理事に選出され，1959（昭和34）年まで継続して同理事を務めた。

地方組織の設立については1936（昭和11）年第15回倉敷大会で，部会の開催およびそれに関する記事の大日本生理学雑誌掲載について議論がなされた。これは，第14回大会での多数の演題の誌上発表，第15回大会での5分科会の実施等，演題の急増がきっかけとされる。そして，1939（昭和14）年から生理学東京談話会が学会公式行事となり，抄録が大日本生理学雑誌に掲載されるようになり，地方会組織が設立された。

また，第15回大会では，生理学用語についての議論が行われ，橋田教授が委員長となり用語の選定が行われ，1938（昭和13）年に大日本生理学雑誌第3巻の附録に英語またはドイツ語，および日本語を併記した生理学術語彙として出版された。同年4月に京都で行われた第17回大会時の評議員

会では，生理学に関する国立研究所設置について，また，IUPS 日本事務所設置の是非について議論が行われた。1939（昭和14）年12月には東京において生理学会学術小講演会が行われ，23題の発表があった。以降第4回までこの講演会が実施された。

学会関係雑誌としては，大日本生理学雑誌とは別に生理学東京談話会機関誌として刊行された生理学試道集（生理学餘外集の後継誌，図4）を基に，日本生理学評論が1941（昭和16）年および1942，1943（昭和17-18）年に2巻ずつ刊行，生理学東京談話会が発行，岩波書店が印刷・販売を行った（図5）。同誌では大日本生理学雑誌には掲載されない総説および展望を主体とし，単に医学分野に限らず理農科系統の生理科学を包含して学問を発展させることを目指した。さらに総説のみならず，試道頁として，実験回顧，書評，学会記事，教室通信等を掲載した。また，大日本生理学学会創立20周年記念として，第1回から第14回までの全1,378発表演題の題名・発表者氏名および所属（第1巻P.194-254），各大学生理学講座・研究室の研究業績目録，さらに，第11回日本医学会

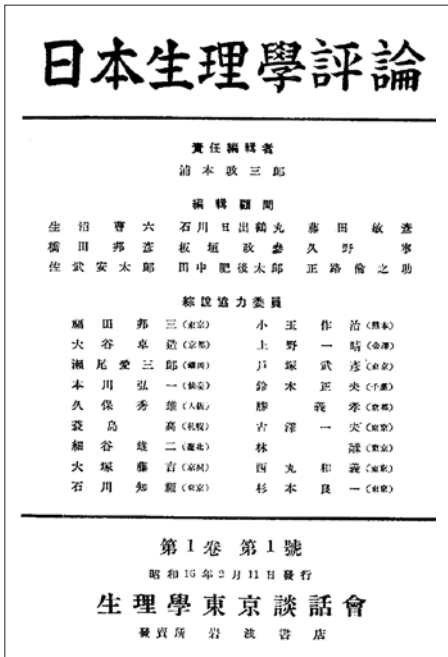


図5. 日本生理學評論

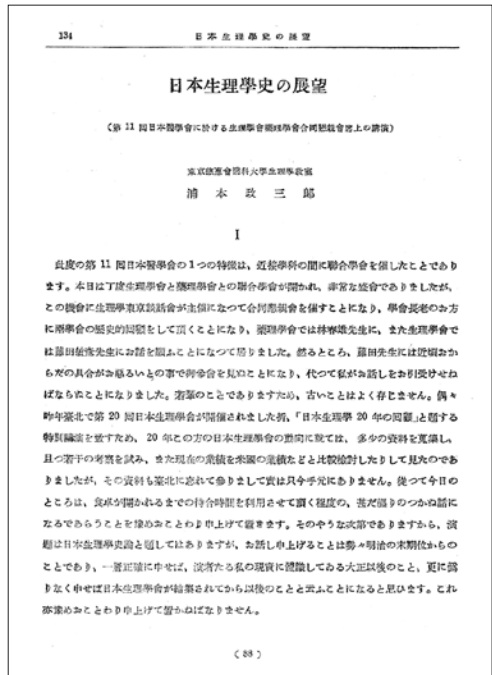


図6. 日本生理學史の展望

における生理学会薬理学会合同懇親会における浦本政三郎による講演「日本生理学史の展望」全文（第2巻P.134-148）、が掲載されている（図6）。

1942（昭和17）年、すでに1940（昭和15）年から文部大臣に就任していた橋田邦彦は多忙のため常任幹事を退任、代わって加藤元一、坂本嶋嶺が常任幹事に就任した。同年、東京で開催された第11回日本医学会に際して、第3分科会生理学会および第5分科会薬理学会の連合学会が開催され、5題の講演が実施された。

### ▶第二次世界大戦による学会活動中断

太平洋戦争戦時下においても学会大会は1943（昭和18）年第22回九州大会までは実施され、162題（誌上発表を含む）の発表が行われた。本大会では田原 淳、進藤篤一、板垣政参が、それぞれ心臓刺激伝導系に関して特別講演および映像供覧を行った。この際、次回大会を1944（昭和19）年に東北大学生理学教室で開催することを決定したが、戦火が苛烈になったため大会開催は中断した。大日本生理学雑誌も原著論文掲載を続けてきた

が、1944（昭和19）年発行の第9巻第7号からは雑誌「条件反射」と合併、さらに紙の配給停止に伴い、同年12月発行の11号をもって休刊となった。なお、第9巻は892ページ、原著数121と過去最高を記録しており、生理学者が戦時下の過酷な状況にもかかわらず生理学の継続・発展に尽力していることがうかがわれる。

第二次世界大戦が終結し、1946（昭和21）年に第23回東北大会が再開した。また、その時期には日本の医学教育制度が改変され大学医学部、医科大学数は45に増加した。さらに旧帝国大学医学部を除いて単講座制であった医学部、医科大学の中で2講座制に移行するものもあり、生理学担当教員が増員された。さらに、学会の設立、またその運営を担ってきた橋田邦彦の終戦直後の自死、浦本政三郎の公職追放により、学会運営を取り巻く環境は激変した。このような新たな情勢への対応として常任幹事数増員等の組織改革が図られ、第23回大会時に常任幹事が従来の6名から12名に

<p>THE JAPANESE JOURNAL OF PHYSIOLOGY</p> <p>EDITED FOR THE PHYSIOLOGICAL SOCIETY OF JAPAN BY YAS KUNO</p> <p>Volume 1 June 1950 - March 1951</p>		<p>THE JAPANESE JOURNAL OF PHYSIOLOGY</p> <p>VOLUME 1 JUNE 1950-MARCH 1951</p> <p>CONTENTS</p> <p>TAKAI, I. Electrical Stimulation of Nerve Fibers. Part I. Excitation by Locally Stimulating Currents.....1</p> <p>TAKAI, I. and YAMAMOTO, M. Electrical Stimulation of the Nerve Fibers. Part II. Excitation by Repetitive Stimulating Currents.....2</p> <p>YAMAMOTO, M. Potentials of the Human Nerve.....3</p> <p>TAKAI, I. and KATSUMI, T. A New Rate Law for Potentials in the Body Surface.....4</p> <p>KATSUMI, T. The Function of the Presynaptic Membrane.....5</p> <p>ANDERSON, A. Studies on the Photochemical Action. VII. Report on the Mechanism of Photochemical Action by Chlorine and Fluorine.....6</p> <p>YAMAMOTO, M. The Interaction in Various Muscles. (Observations on Litter Nerve Model). Part I. The Anesthetic Action.....7</p> <p>YAMAMOTO, M. The Interaction in Various Muscles. (Observations on Litter Nerve Model). Part II. The Effects on the Release of the Anesthetic Agents.....8</p> <p>ANDERSON, A. Effects of Size on the Shape Factor in Electric Stimulation of Nerve.....9</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....10</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....11</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....12</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....13</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....14</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....15</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....16</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....17</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....18</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....19</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....20</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....21</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....22</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....23</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....24</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....25</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....26</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....27</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....28</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....29</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....30</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....31</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....32</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....33</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....34</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....35</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....36</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....37</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....38</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....39</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....40</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....41</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....42</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....43</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....44</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....45</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....46</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....47</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....48</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....49</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....50</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....51</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....52</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....53</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....54</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....55</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....56</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....57</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....58</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....59</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....60</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....61</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....62</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....63</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....64</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....65</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....66</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....67</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....68</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....69</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....70</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....71</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....72</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....73</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....74</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....75</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....76</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....77</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....78</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....79</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....80</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....81</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....82</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....83</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....84</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....85</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....86</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....87</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....88</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....89</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....90</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....91</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....92</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....93</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....94</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....95</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....96</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....97</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....98</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....99</p> <p>ANDERSON, A. and HARRIS, E. The Anesthetic Effects of Chlorine, Bromine and Fluorine on the Response of the Nerve Fibers.....100</p>	
---	--	---	--

図 7. The Japanese Journal of Physiology (JJP)

増員された。また、1948（昭和 23）年第 25 回大会時に大日本生理学会から日本生理学会に名称が変更された。

日本生理学雑誌については 1946（昭和 21）年 8 月に大日本生理学雑誌から名称変更の上、第 10 巻として再刊、山形県の鶴岡印刷を発行所として復刊された。英文生理学雑誌については 1950（昭和 25）年第 27 回大会評議委員会にて刊行の議論があり、久野 寧委員長が主監となって同年 6 月から英文誌 The Japanese Journal of Physiology (JJP) 刊行が始まった（図 7）。

1951（昭和 26）年第 28 回大会評議委員会にて、常任幹事が再度 6 名へ減員され、また、久野 寧の提案により IUPS 加盟団体として日本生理科学連合が設置され、毎年秋季に講演会が開催されることになった。

1952（昭和 27）年第 29 回大会においては評議委員会議事をあらかじめ議論するために代議員制を実施することになり全国から 17 名が選ばれた。

1953（昭和 28）年第 30 回大会では、初めて特別会員として緒方大象、越智真逸の両氏が推薦された。その後、学会に貢献した 70 歳を超える会員を特別会員に推薦する慣例になった。また、この大会では日本学術会議会員候補者推薦問題が協議されて、日本生理学会会員が学術会議会員に立候補して学会推薦を求めた際には常任幹事会に附議して決定することになった。

1954（昭和 29）年第 31 回大会評議委員会にて、常任幹事を 6 名の在京幹事のみならず全国的に選ぶ議が提出され、新たに 14 名の地方幹事を新設（北海道 2、東北 2、関東新潟 2、中部 2、近畿 2、中国・四国 2、九州 2）する幹事増員などの改革が行われた。また、それに伴い代議員制は廃止された。

さらにこの年の大会では第 21 回 IUPS 世界大会の日本招致が提案され、常任幹事会で久野 寧が推薦され、1955（昭和 30）年第 32 回大会において委員として指名された。しかし、1956（昭和 31）年第 33 回大会の評議委員会において第 21 回 IUPS 世界大会日本招致についての議論および投票が行われ、招致を見合わせるようになった。

地方会については生理学東京談話会が 1946（昭和 21）年 9 月に再開、その後、学術報告集会形式の開催となり、同様に 1949（昭和 24）年生理学札幌談話会、同年 10 月に中国四国談話会、11 月に生理学九州談話会、翌 1950（昭和 25）年 10 月には近畿生理学談話会、生理学中部談話会が設置された。

これらの地方会における講演抄録は 1950（昭和 25）年の日本生理学雑誌 12 巻から掲載が始まった。さらに、従来、原著論文のみの掲載であった日本生理学雑誌は、1953（昭和 28）年の 15 巻からは総説掲載が、1955（昭和 30）年第 17 巻からは各生理学研究室の研究業績目録となる生理学論

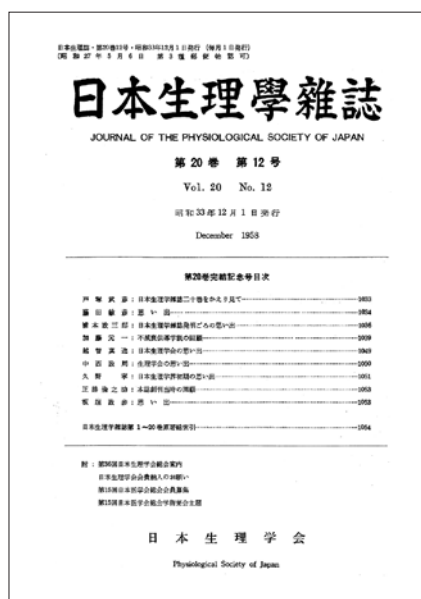


図8. 日本生理學雜誌 第20巻完結記念号

文表題集を掲載するようになった。

1955（昭和30）年以降、新制大学院が設置され、新制大学院では生理学教室は全て2講座になり生理学教員の急増、および医学部出身者の基礎医学志望急減がおこった。そのような背景を基に1958（昭和33）年第35回大会では生理学振興および学生実習改善が提起され、それぞれについて内山孝一、本川弘一を委員長として委員会が設置された。これらが日本生理学会における各委員会活動の出発点となった。さらにこの大会で、日本生理学の歴史編集案が提出され、浦本政三郎委員長の下、教室史および業績誌の編集が開始された。同年、日本生理学雑誌20巻刊行記念として、20巻完結記念号が発行され（図8）、刊行にかかわってきた戸塚武彦や浦本政三郎らが寄稿した他、第1巻から20巻までの原著総索引が掲載された。

教室史および業績誌編集については浦本門下の日本大学教授・内山孝一が委員長を引き継ぎ、1966（昭和41）年からは日本生理学雑誌において当時の日本にあったすべての生理学教室の教室史の掲載が始まった。その後、名取礼二、酒井敏夫にこの事業は引き継がれていった。

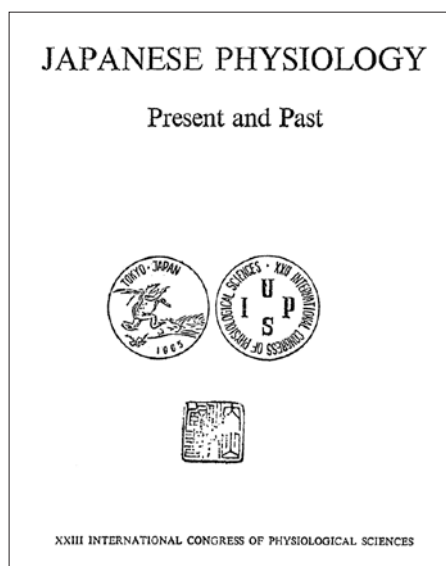


図9. Japanese Physiology, Present and Past

1959（昭和34）年に実施された第21回IUPS世界大会時の総会で久野 寧が理事を退任し、代わって加藤元一が理事に選出された。

1960（昭和35）年第37回大会では、日本生理学会会則の大幅な改定が行われたが、基本的な立場については変わらなかった。

このような学会発展はIUPS世界大会日本招致の機運を再度生み、1962（昭和37）年にオランダで開催された第22回IUPS世界大会時の総会において第23回IUPS世界大会を日本が担当することが決定し、1963（昭和38）年には組織委員会が作られた。委員会構成は日本生理科学連合に当時加入していた生理学、薬理学、衛生学、動物学、植物学、農芸、内分泌、ビタミン、体力医学の9学会より37名の委員が選出され、加藤元一教授が委員長に、また、組織委委員より常任委員に選ばれ、加藤委員長が委員長を兼任した。同年10月にCongress Officerが決められ、会長に加藤元一、副会長に熊谷 洋、名誉会長に久野 寧が選出され、総務を林 操、庶務を竹下俊雄（日本学術会議）、学務を勝木保次、財務を熊谷 洋の各幹事が担当することになった。

また、学会プログラム委員会は松田幸次郎が委



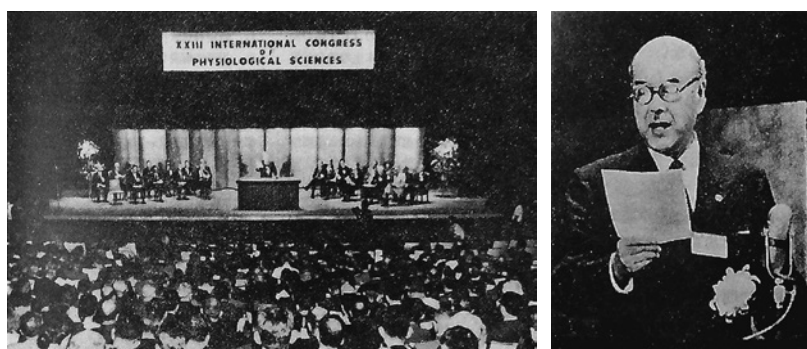


図 10. 第 23 回 IUPS 世界大会

員長，時実利彦・吉村寿人が副委員長を務めた。さらに記念誌小委員会は内山孝一が委員長となり，*Japanese Physiology, Present and Past* を 1965（昭和 40）年に刊行した（図 9）。このとき，日本の生理学の象徴として，京都・高山寺に伝わる鳥獣戯画に描かれた絵の中から生理学研究・教育に用いられてきたカエルを意匠化して，表紙に表した。その後も日本生理学雑誌および JJP の余白に鳥獣戯画のさまざまなカットが使用され，後に日本生理学会の正式ロゴマークに制定された。

1965（昭和 40）年 9 月 2 日から同 9 日まで東京の国立教育会館を会場として，第 23 回 IUPS 世界大会（会長・加藤元一，副会長・熊谷 洋）が東京にて開催された。Invited Lecture 12, Symposium 12, Free Communication 1,208（国外 924，国内 284）のプログラムが実施された。また参加国は 47 か国，参加人数は約 3,000 名であり，この国際大会が日本生理学会発展の一つの契機になった（図 10）。

他方，1963（昭和 38）年第 40 回大会では，生理学将来計画の委員会を作る案が出され，1965（昭和 40）年第 42 回大会で，本川弘一を委員長として将来計画委員会が発足した。そして 1967（昭和 42）年 1 月には本委員会から生理学研究所設立案が提出され，それを基に同年 10 月の日本学術会議総会に研究所設立案が上程され，人体基礎生理学研究所（仮称）として政府勧告案が採択された。このために，日本生理学会に準備委員会，業務専門委員会が作られた。1968（昭和 43）年 5 月には

日本学術会議に人体基礎生理学研究所準備委員会が結成され，本川弘一を委員長として関連学会から 34 名が準備委員会委員として選出された。また，準備委員のうち 15 名が実行委員会委員となり内菌耕二を委員長として活動を開始した。

1968（昭和 43）年第 45 回大会では生理学教育委員会が作られ，藤森聞一を委員長に 19 名の委員が選出された。また，この委員会は基礎医学教育懇談会結成に参加し，他基礎医学分野と共に教育状況調査等を行い，大学院設備標準等の資料の作成を行った。

日本生理学雑誌は 1965（昭和 40）年第 27 巻より内菌耕二編集幹事の下，編集委員に地方委員が加わり，短報欄が新たに設けられ，生理学振興や実習改善等の提案や会報その他が掲載されるようになった。また，1967（昭和 42）年第 29 巻より欧文の掲載が始まった。さらに，1971（昭和 46）年第 33 巻第 1，2 号では生物リズムについての特集号が作成された。

JJP は 1968（昭和 43）年に久野 寧編集主幹の要望でその編集および運営を日本生理学会が担当することが決まり，松田幸次郎が委員長となり方針立案を行った。そして，日本生理学雑誌 1970（昭和 45）年第 32 巻において答申が提出された。それに基づき JJP は第 21 巻から日本生理学会の事業として吉村寿人が主監となった。

生理学用語については 1966（昭和 41）年第 43 回大会において委員会再開が諮られ，時実利彦が委員長となり用語に解説をつける形式で整理を行

い、1972（昭和47）年8月に医学書院より生理学用語集が出版された。

この時期には将来計画委員会、教育委員会のほかに、若手グループの会（1965年）等の組織が新設され、現在に至る学会の基礎が形成された。

学会事務局については、設立より1970（昭和45）年3月までは東京大学医学部生理学教室に設置されていたが、同年4月より東京都文京区本駒込の東洋文庫内に、その後東京都文京区本郷に移された。

### ▶学会の成熟（1970-90年代）

1970年代に入ると、1960年代後半に盛り上がりを見せたいわゆる学園紛争が沈静化し、大学教育・研究が正常化に向かった。一方、1970、80年代は全国各地で医学部、歯学部、さらに医療系学部が新設され、それに伴い各大学で生理学講座・教室が新設されたことから会員数も増加し、1980（昭和55）年末には総会員数が3,000名に、1985（昭和60）年末には正会員数が3,000名に達した。日本生理学会は1972年に創立50周年を迎え、1972（昭和47）年に岩手医科大学にて開催された第49回日本生理学会大会では、生理学特別座談会が開催され、日本の生理学を牽引してきた加藤元一（誌上参加）、東龍太郎、瀬尾愛三郎、西丸和義、佐藤熙、箕島高、戸塚武彦、内山孝一による講演と質疑応答が開催された（図11）。

翌1973（昭和48）年には第50回記念大会が九州大学で開催された。それを記念して日本生理学雑誌35巻12号は日本生理学50周年記念号として刊行された。日本生理学を牽引してきた生理学者が以下の文を寄稿した。「日本生理学会の沿革」（名取礼二）、「生理学の歩み」（戸塚武彦）、「生理学余外集について」（内山孝一）、「生理学談話会の回顧」（若林 勲）、「J. P. P. の発刊をめぐる」（吉村寿人）、「研究体験から」（小玉作治）、「新知思新」（竹中繁雄）、「台湾での生理学会（第20回）の思い出」（久保秀雄）、「日本生理学のゆくえ」（瀬尾愛三郎）、「日本生理学研究発展史（刺激生理学）」（鈴木正夫）。さらに福田邦三・戸塚武彦・内山孝一・若林 勲・名取礼二、塚田裕三（司会、編集

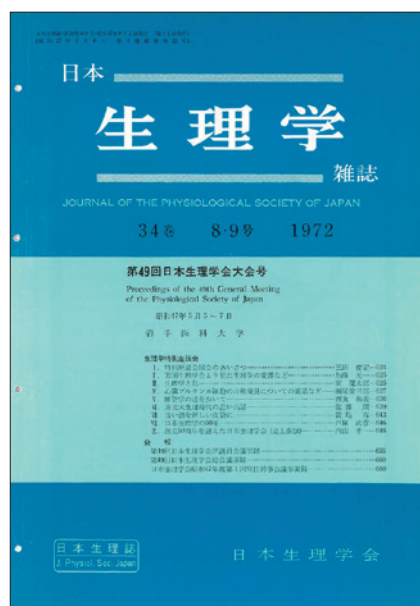


図11. 日本生理学雑誌 第49回日本生理学会大会号

幹事）が参加した座談会、「日本生理学50年の歩み」が掲載された（図12）。

### 1. 大会

日本生理学会会員数の増加に伴い、大会演題数も1981（昭和56）年第58回徳島大会で505題、1982（昭和57）年第59回大会では、1研究室単位からの応募演題数に制限を掛けない方針となり671題に、1986（昭和61）年第63回山形大会には824題と急激に増加した。大会学術面においても、一般演題およびデモンストレーションのみの構成から、1974（昭和49）年第51回札幌大会ではシンポジウムの開催、1977（昭和52）年第54回鹿児島大会ではポスター発表実施等の新しい試みが導入された。さらに1988（昭和63）年第65回和歌山大会では、初めての試みとして生理学会会員である名取礼二と渡辺 悟による特別講演が実施された。また、口演については17シンポジウムのみとする、というその後の多くの大会が採用してきた形式での大会運営が行われた。一方、大会発表を世界に発信する目的で、1979（昭和54）年第

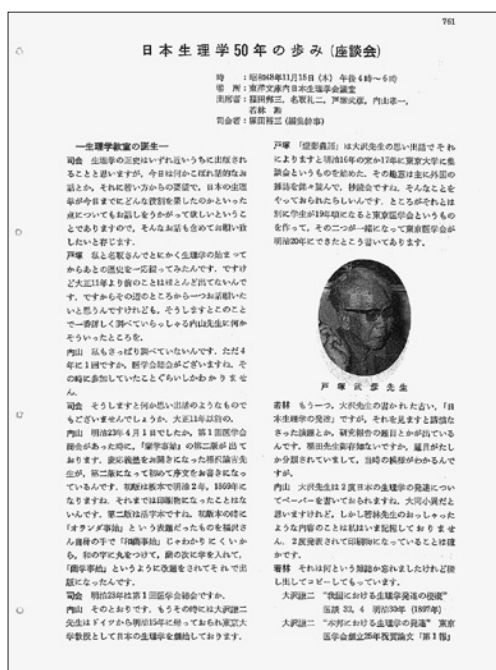


図 12. 座談会「日本生理学 50 年の歩み」

56 回東京大会より日本生理学会誌に掲載される学会抄録はすべて英語記載になり、さらに 1989 年第 66 回岡山大会以降学会抄録は JJP Supplement として発行されるようになった。1996 (平成 8) 年第 73 回福井大会からは、電子的方法 (フロッピーディスク) による参加登録が始まった。

## 2. 生理学研究所の設立

研究面では、人体基礎生理学研究・教育のための大学共同利用機関として生理学研究所が 1977 (昭和 52) 年に愛知県・岡崎市に創設、生理学研究所および生理学研究者育成をナショナルセンターとして推進していく体制が整った (内菌耕二, 生理学研究所発足にあたって. 日本生理学雑誌 39: 473, 1977)。

生理学交流委員会は 1977 (昭和 52) 年 5 月、岡崎国立共同研究機構生理学研究所発足に際し、同研究所運用や日本の生理学の研究交流検討のための組織として内菌耕二幹事より同年 4 月に提案があり 3 年間にわたり活動を行ったが、当初の目的

を達したものとして解散した。

## 3. 学会運営

1970 年代以来増加を続けてきた会員数は、1994 (平成 6) 年末の一般会員 3,443 名を最高に漸減しはじめ、20 世紀末の 2000 年末には 3,200 名になった。学会運営に関しては 1973 (昭和 48) 年第 50 回大会時に会計監事から監事への名称変更が行われた。1997 (平成 9) 年には新たに若手奨励賞の創設、将来計画委員会の再発足が決まった。1999 (平成 11) 年には新たに発足した生物科学連合への加盟、また、将来計画委員会提言により若手の会が始まった。

1979 (昭和 54) 年第 56 回大会時に外国人会員に関する審議が行われ、「名誉会員は、本会に多大の貢献のあった外国人で、評議員会から推薦され総会の賛同によって定められる」ことになり、1980 (昭和 55) 年には John Carew Eccles 博士が名誉会員になった。さらに 1985 (昭和 60) 年には、Ichiro Tasaki 博士、C. McC. Brooks 博士が名誉会員となった。1993 (平成 5) 年に C. McC. Brooks 博士が逝去された。1997 年には新たに A. Arimura, C. Edwards, E. Simon, E. Perl, RF. Shmidt 氏が名誉会員になった。J. C. Eccles 博士は 1998 (平成 10) 年に逝去された。1999 (平成 11) 年には新たに TB. Bolton, W. Trautwein, K. Koizumi, D. Noble 氏が名誉会員になった。

会費・会則等については、1976 (昭和 51) 年に正会員が 4,000 円、1977 (昭和 52) 年には 5,000 円、1980 (昭和 55) 年には 6,000 円、1987 (昭和 62) 年に 7,000 円、1996 (平成 8) 年に 8,000 円と改訂されてきた。一方で 1979 (昭和 54) 年には名誉会員会費免除が、また 1982 (昭和 57) 年には臨時会費納入者は当該年度のみ会員と連名で業績を発表できることとなった。1996 (平成 8) 年には学生の会費優遇 (5,000 円) が決まった。

事務局機能については 1996 (平成 8) 年 3 月には、学会事務所の電子メールが開通し、電磁的な事務対応が可能になった。



#### 4. 生理学教育

生理学教育委員会は1973（昭和48）年、本間三郎が委員長となり、生理学学生実習設備改善のための調査および要望書作成を引き続き実施した。1975（昭和50）年以降は酒井敏夫が委員長となり、生理学学生実習設備改善のためには実習内容の再検討を行うべきであり、そのためにも生理学実習書を編集すべき、という方針が定まった。既に、大村 裕が各大学で作成していた生理学実習書の調査を実施しており、それを基に教育委員会は生理学実習書の編集を行い、1977（昭和52）年3月に南江堂から出版された。さらに委員会は生理学実習改善要望書を作成して文部省に提出、国立大学系生理学教室に対して生理学実習改善の予算的措置が行われた。

1978（昭和53）年4月には大村 裕委員長の下、生理学実習書を基にしたビデオ教材作成が計画され、各委員は分担課題の実習用ビデオ教材を作成した。また、生理学実習書は、生理学会国際交流基金の援助を基に Physiology Laboratory Manual For Medical Students (1980) として英文文化され、1980（昭和55）年、ブダペストで開催された第28回IUPS世界大会にてビデオ教材と共に大村 裕によって供覧された。

1991（平成3）年には新・生理学実習書、2013（平成25）年には新訂生理学実習書として改訂版が南江堂から出版された。

#### 5. 機関誌

1993（平成5）年にはJJP優秀論文賞創設が決定し、翌1994（平成6）年からJJP入澤記念賞として前年度にJJPに掲載された最優秀論文を表彰することになった（第1回受賞：河原克雅）。1996（平成8）年にはJJPにBiophysics部門が新設され、葛西道生が編集担当に就任した。さらに2000（平成12）年にはJJPに国際編集顧問枠が新設された。

一方、日本生理学雑誌については原著論文、短報の投稿が漸減し、投稿分野も偏りがみられるようになってきた。また、生理学会大会抄録がJJPに掲載されることになってからは、地方会抄録の

みが学会抄録として日本生理学雑誌に掲載されることになり、どのように日本生理学雑誌を編集すべきか、また、号外として毎年度、各生理学教室で発表された論文を掲載する生理学論文表題集を発行することの是非について、議論が重ねられていった。

#### 6. 国際交流

国際交流については、1978（昭和53）年に伊藤正男庶務監事より国際交流委員会設置の提案があり、①若手研究者の国際会議出席旅費援助、②発展途上国研究者援助を目的として設置され、いったん1980（昭和55）年に委員会任務を終了したが、国際交流基金は存続されることになった。

IUPS役員：勝木保次が1971（昭和46）年から1980（昭和55）年までは理事、1980（昭和55）年から1983（昭和58）年までは副会長を務めた。また、常任幹事の伊藤正男は1980（昭和55）年から1993（平成5）年までは理事を、同年からは副会長を末年まで務めた。

1980年代半ばにはアジア・オセアニア地区での生理学会協働について検討が始まり、1986（昭和61）年11月26日から29日まで、タイ・バンコクでfirst Asian and Oceanian Physiological Societies (AOPS) 大会が開催され、伊藤正男を中心に大会運営に協力した。伊藤正男をはじめ参加各国代表から Federation of Asian and Oceanian Physiological Societies (FAOPS) 設立が提案され、最終的には1989（昭和64、平成元）年にヘルシンキで開催された第31回IUPS世界大会における総会でFAOPS設立が承認された。日本生理学会は、FAOPS発足時の初期資金（10,000米ドル）と会費（3,000米ドル）を出資した。また、伊藤正男はFAOPS設立から1998（平成10）年までFAOPS Presidentを務めた。第2回FAOPS大会は1990（平成2）年11月12日から15日までインド・ニューデリーで、第3回大会は1994（平成6）年11月7日から10日まで中国・上海で、第5回大会は1998（平成10）年9月27日から10月1日までオーストラリア・ブリスベンで開催された。この時の総会で伊藤正男はPresidentを退任



し、常任幹事の金子章道が新たに Secretary General に選出された。

2 国間の生理学会交流については、1991（平成 3）年 7 月 18 日から 20 日迄に英国ケンブリッジ大学において、日英合同生理学会が実施され、英国の Dr. Catterrell、日本の菅野富夫が幹事を務め、5 つのシンポジウムが開かれ、日本からは 75 名が参加した。1995（平成 7）年には第 2 回日英合同生理学会として岡崎シンポジウム（3 月 27-28 日；6 セッション実施。英国等から 102 名、日本から 200 名参加）、名古屋シンポジウム（4 月 1-2 日；488 演題実施。英国等から 209 名、国内 738 名参加）が行われた。2000（平成 12）年には日加生理学会がカナダの Lake Louise で実施され、日本から 24 名、カナダから 116 名が参加した。

## 7. 用語集

第 3 次生理学用語集について、1978（昭和 53）年 12 月、常任幹事会は改訂が必要であると判断し、生理学用語委員会の再発足が決定された。1979（昭和 54）年第 56 回大会において、酒井敏夫を委員長として活動を開始し、1984（昭和 59）年に南江堂から出版、1993（平成 5）年には新たに生理学用語集委員会が発足し、改訂第 5 版が 1997 年 6 月に南江堂から刊行された。

## 8. 研究倫理

1980 年代になり、動物実験に関する倫理的な問題がさまざまな形で取り上げられるようになり、日本生理学会でも 1987（昭和 62）年に動物実験に関する委員会が設置され、初代の委員長に塚田裕三が選ばれた。1999（平成 11）年 12 月には動物の愛護および管理に関する法律が成立し、以降、同法律に基づいた学会独自の動物実験指針の制定、また、生理学会大会でのシンポジウム企画が行われていった。

## 9. 日本生理学史の記録

1950 年代に浦本政三郎が中心となって始まった日本生理学の歴史の記録化は、その後、内山孝一・名取礼二・酒井敏夫らによって引き継がれ、

1966（昭和 41）年から各大学の生理学教室史として日本生理学雑誌に掲載されていった。また、1973（昭和 48）年 12 月に発刊された日本生理学雑誌第 35 巻 12 号の 50 周年記念号には、日本生理学会史編集委員会・名取礼二の執筆により「日本生理学の沿革」として日本生理学会全体のこれまでの歩みが掲載された。これらに日本生理学会史編集委員会・酒井敏夫が執筆した「1973（昭和 48）年以降の日本生理学会の歩み」を加え、日本生理学教室史・上巻が 1983（昭和 58）年に日本生理学会より刊行された。さらに、1970 年代以降の医学部、歯学部、健康科学系大学・学部の新設、国公私立研究所の設立等により生理学にかかわる研究室が新たに開設されたこともあり、それらの研究室の教室史を記録する機運が広まり、1986（昭和 61）年の第 63 回日本生理学会大会時に、日本生理学教室史・下巻出版が発議され、望月政司を委員長として編集活動が開始され、1988（昭和 63）年に出版された（図 13）。

## ▶新時代の生理学会への模索

1990 年代後半から始まった学会員数漸減は日本生理学会本体の運営や大会のあり方を再考する機運を生み出した。以下、1999 年以降の日本生理学会の歩みを年次ごとに記録する。

1999（平成 11）年の第 76 回大会は 3 月 27 日から 29 日まで長崎市で開催された。前日に行われた第 1 回常任幹事会では、従来の地区別枠に加えて女性や若手研究者および薬学、歯学、農学、理学などの分野の幹事を特別枠として入れることについての提案があり、議論を継続することになった。なお、前年 St. Petersburg で開催された第 33 回 IUPS 世界大会の赤字補填への協力を IUPS より要請され、日本生理学会も 13,800 米ドルの援助を行ったことが報告された。

同年、本田良行氏および佐藤謙助氏が特別会員に推戴された。

2000（平成 12）年の第 77 回大会は 3 月 27 日から 29 日まで横浜市で開催された。

同年、一般会員会費の値上げおよび学生会員会

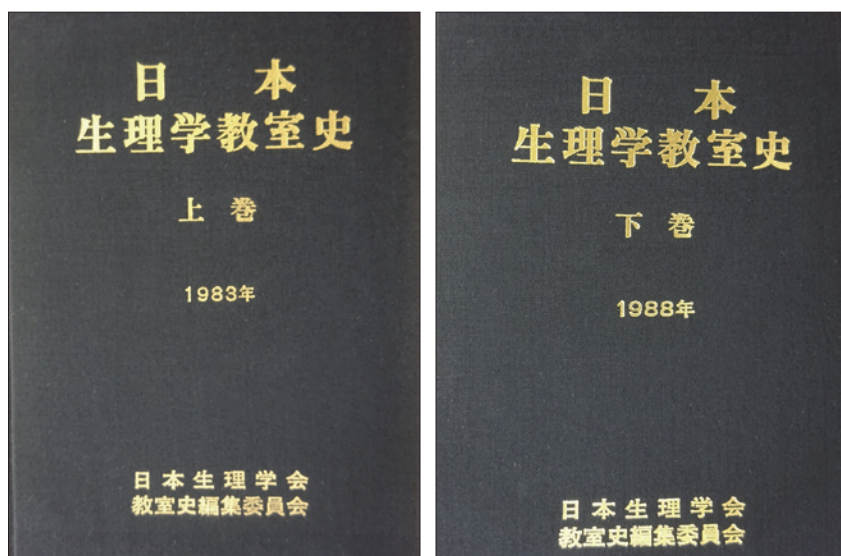


図 13. 日本生理学教室史 上巻・下巻

費の値下げ，臨時会員会費の撤廃が正式決定された。また，2009 年 IUPS 世界大会日本開催を目指して 2001 年 IUPS 総会に立候補を行うことに決まった。また，学術集会活性化と研究費制度の検討を目的として，研究費委員会を改組して新たに学術研究委員会を設置することが承認された。さらに，常任幹事の任期制を検討することになった。また，評議員の推薦により非会員外国人に大会発表の機会を与えることになった。同年，特別会員として菅野義信氏が推戴された。

2000 年は JJP 創刊 50 年にあたり，菅 弘之 JJP 編集長による「Past, Present and Future of the JJP」が Editorial として JJP50 巻に掲載された。

同年には特別会員の西田 勇氏が逝去された。

2001（平成 13）年に日本生理学雑誌の印刷所が鶴岡印刷から杏林舎に変更になったことに伴い，2001 年 1 月発行の日本生理学雑誌 63 巻 1 号より表紙デザインおよびレイアウトが刷新された（図 14）。第 78 回日本生理学会大会は 3 月 29 日から 31 日まで京都市にて開催された。同年，常任幹事の任期制導入が決まり，具体的には常任幹事の任期を 1 期 4 年としその後 2 年間は被選挙権を持た

ないこと，また，継続性を維持するために 2 年ごとに半数改選を行うことになった。さらに，特別幹常任幹事を常任幹事の投票により選出することが承認された。IUPS 招致委員会より，IUPS 事務局への提案として，2009 年 IUPS 世界大会開催地は京都，統一テーマは“Function of Life: Elements and Integration”とすること，日本生理学会年次大会合同開催とすることが報告された。また，常任幹事選出および役員名称について「庶務・会計・編集等幹事を置く」を「会長および財務，広報担当等の幹事を置く」と改訂することになった。同年，富田忠雄氏，宮本博司氏を特別会員に推戴することになった。

同年 8 月 26 日から 31 日までニュージーランドの Christ Church で第 34 回 IUPS 世界大会が開催された。その際の総会にて第 36 回 IUPS 世界大会の京都開催が決定した。

長らく日本生理学雑誌号外として発行されてきた生理学論文表題集は 2001（平成 13）年に発行された平成 13 年度生理学論文表題集をもって刊行を終了した。

2002（平成 14）年は 3 月 28 日から 30 日に広島



図 14. 日本生理学雑誌 第 63 巻 1 号

市において第 79 回大会が開催された。同年、会長として金子章道、財務担当幹事・宮崎俊一、編集長等幹事・岡田泰伸氏が選出された。また、特別幹事幹事として久保義弘、小泉 周、能勢 博氏が選出された。男女共同参画委員会（仮称）の設置について説明があり、委員長を水村和枝幹事とすることが承認された。

同年 9 月 23 日から 26 日までマレーシア・クアラルンプールで第 5 回 FAOPS 大会が開催され日本生理学会会員も多数参加した。

また同年には特別会員の杉靖三郎氏が逝去された。

2003（平成 15）年は 3 月 24 日から 26 日まで第 80 回大会が福岡市において行われた。この大会は第 76 回日本薬理学会年会との同一会場での同時開催という初めての試みであり、両学会の共同シンポジウムが 15 実施され、薬理学会との学術的交流が行われた。同年、今後日本生理学雑誌に邦文原著および短報論文の掲載を行わないこと、および JJP 投稿の電子化が決定された。さらに顧問弁護士契約および学会ホームページ（HP）を一般向けにリニューアルし、その作業を外注することに

なった。また、「生理学領域における動物実験に関する基本指針」改定案が承認され、学会 HP 上に公開された。

同年には、特別会員の本田良行氏が逝去された。

2004（平成 16）年の第 81 回大会は 6 月 2 日から 4 日まで札幌市で開催された。前日に開催された第 1 回常任幹事会では、設立当初から使われてきた大会当番幹事の名称が大会長に変更されることが決まった。また、島津 浩氏、星 猛氏が特別会員に推戴された。

この年、日本学会事務センターによる学会預かり金流用問題が発覚し、8 月には同センターが破産した。日本生理学会は日本学会事務センターには業務委託を行っていなかったが、JJP の編集・発行は日本学会事務センター傘下の学会誌刊行センターが行っており、編集担当者は日本学会事務センター職員であることから、学会誌刊行センターにて JJP 刊行を継続することが困難になった。そこで、JJP 編集委員会は複数の出版社に JJP 刊行意思があるかを確認し、4 社から提案を受け、最終的に Medical Tribune 社と契約を行うことになった。購読料をどのように課すかについては議論を続けることになった。また、同年 1 月から日本生理学雑誌のデザインが刷新され、表紙に会員の研究成果を掲示（66 巻 1 号から 9 号までは日本生理学雑誌掲載の総説から、それ以降は直近の日本生理学会大会ポスター発表から）するようになった（図 15）。

2005（平成 17）年の大会は 5 月 16 日から 18 日まで仙台市で開催された。また、3 月 31 日から米国 San Diego で第 35 回 IUPS 世界大会が開催された。総会にて 2009 年第 36 回 IUPS 世界大会の京都開催が最終的に決定された。また、同時に金子章道会長が IUPS President に就任した。

金子会長が IUPS 組織委員会委員長交代および日本生理学会会長の退任を希望され、新たに会長代理に岡田泰伸氏、IUPS 組織委員会委員長として宮下保司教授が選ばれた。

同年、特別会員に本郷利憲氏が推薦され、承認



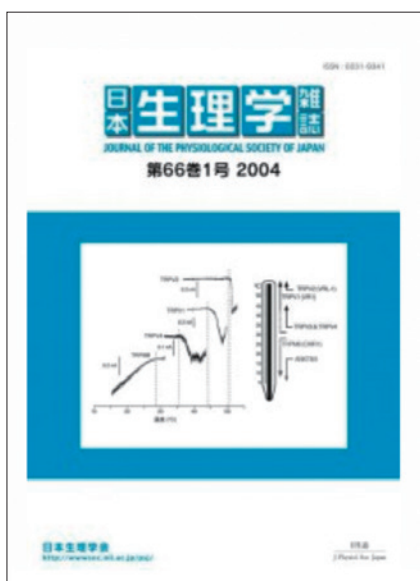


図 15. 日本生理学雑誌 第 66 巻 1 号



図 16. The Japanese Journal of Physiology (JJP) 最終号 第 55 巻 12 号

された。

JJP に関しては誌名を The Journal of Physiological Sciences (JPS) に 2006 年から移行することが決まり、また、JJP, JPS の会計は日本生理学会が行うこととなった。2005 年 12 月に JJP としての最終号である 55 巻 12 号が発行され (図 16)、2006 年 2 月には新生 JPS として 56 巻 2 号が Medical Tribune 社の編集で、日本生理学会より刊行された (図 17)。

当時、学術団体の法人化についてさまざまな議論・検討が行われていた。法人格を持たない任意団体である日本生理学会においても法人化についての議論が発生し、法人化検討委員会を発足することになった。そして委員長に本間生夫財務幹事が就任した。

同年、特別会員として佐藤昭夫氏、江橋節郎氏が推薦され承認された。また、特別会員の古川太郎氏が逝去された。

2006 (平成 18) 年は 3 月 28 日から 30 日まで前橋市において第 83 回大会が開催された。

その際の評議委員会、総会にて、有限責任中間法人日本生理学会を設立し、さらに独立した人格

なき社団としての「日本生理学会」、「日本生理学会大会」、「第 36 回 IUPS 世界大会」の事務管理、会計管理および会計監査の事業実施を行うことが承認された。また、岡田泰伸氏が会長に、編集・広報幹事副会長として小西真人氏が、財務幹事副会長として栗原 敏氏が選出され、さらに執行部選出方法が決まり、会長を公選制に、また評議員を選挙人とする事が定められた。同年 8 月 14 日付で有限責任中間法人日本生理学会として法人登記された。また、同年から学会員の研究推進や生理学発展を目的として、各グループディナーや地方会が独自で行ってきた賞制度を日本生理学会として公認し、受賞者氏名・所属・研究内容を学会 HP に掲載することになった。

同年 10 月 15 日から 18 日まで韓国ソウル市において第 6 回 FAOPS 大会が開催され、約 800 名の参加者のうち日本から多数の参加があった。総会において役員の改選があり、岡田泰伸日本生理学会会長が FAOPS President に選出された。また、Honorary Member として伊藤正男 (日本)、P. Ratanakorn (タイ)、W.G. Kim (韓国) の各氏が

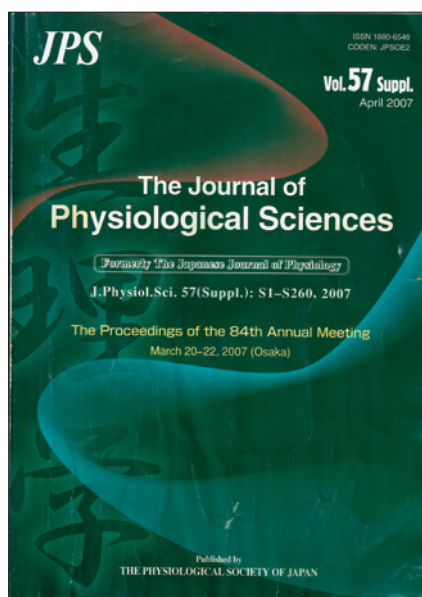


図 17. The Journal of Physiological Sciences (JPS) [発行：Medical Tribune 社]



図 18. The Journal of Physiological Sciences (JPS) [発行：Springer 社]

選出された。

同年には特別会員の佐藤昭夫，江橋節郎，名取礼二，内菌耕二の各氏が逝去された。

2007（平成 19）年は 3 月 21 日から 23 日に大阪市において第 84 回大会が開催された。2007 年 3 月の一般会員数は 2,992 名と，1985 年以来初めて 3,000 人以下になったことから，会員増，学会活性化の取り組みが議論され，1) 非医学部系研究者および若手の入会促進，2) 地方会賞の設置などによる地方会の活性化などが議論された。また，この年にはフィジオーム・システムバイオロジー分野に日本生理学会が関与し分野の発展を推進していくため，フィジオーム・システムバイオロジー推進特別委員会が時限委員会として設置され，委員長を倉知嘉久が務めることになった。

同年には特別会員の有村 章氏が逝去された。

2008（平成 20）年は 3 月 25 日から 27 日まで第 85 回大会が東京都で開催された。同年，JPS の発行が Medical Tribune 社から Springer 社へ変更にな

り，それに伴い 69 巻 1 号から表紙デザインも変更になった（図 18）。第 1 回常任幹事会では，生理学会のみならず日本の基礎医学講座の縮小・統合が進んでおり，教育・研究が危機的な状況にあることから，学術会議等に積極的にアピールする必要があることが指摘され，中等教育へのアウトリーチ活動，他学会との共同学会開催，他国の生理学会との協働等の推進について議論が行われた。

同年 12 月の一般社団法人法施行により，有限責任中間法人は一般社団法人に移行することが決まり，そのための組織変更が必要なことが明らかになった。

2009（平成 21）年には第 36 回 IUPS 世界大会（宮下保司大会長）が第 86 回日本生理学会大会と合同で 7 月 27 日から 8 月 1 日まで京都国際会館で行われた。

Special Lectures 17 題（D. Noble, M-M. Poo, S. Bröer, FM. Aschcroft, A. Miyawaki, C. Franzini-Armstrong, K. Kangawa, JS. Takahashi, S. Nakanishi, Y. Fujiyoshi, N. Rosenthal, F.

Nottebohm, M. Takeichi, J.M. Friedman, R. Latorre, L.Y. Jan, M. Lazdunski), Named Lectures 7 題 (E. Neher, A. Kaneko, S. Grillner, R. Bindels, B.S. McEwen, B.M. Barnes, T. Wang), PSJ Named Lectures 5 題 (S. Tonegawa, M. Ito, A.J. Hudspeth, Y. Rudy, O. Hayashi), シンポジウム・ワークショップ 493 題, 一般演題 (ポスター) 2,655 題が実施され, IUPS 世界大会過去最大規模になった。

関連プログラムとしては Exhibitions for the History of the Physiological Societies in Japan, Exhibition for IUPS Summer Science Program for Children, Meet-the Lectures, IUPS2009 Summer Science Program for Children, また, 21 題のランチョンセミナーが参加者向けに実施された。

さらに一般向けに, 第 36 回 IUPS 世界大会, 第 86 回日本生理学会大会合同市民公開講座が大会最終日の 8 月 1 日に「科学と生命・知・こころ」と題して 4 名のシンポジストを迎えて実施された。第 36 回 IUPS 世界大会終了後にはアーカイブスとして 5GB の DVD (2 枚組) 1,100 部が作成された。その際開催された IUPS 総会にて倉知嘉久氏が First Vice President に就任した。

2010 (平成 22) 年になると, 2 月 17 日に基礎医学系 4 学会, 日本生化学会 (北 潔会長)・日本生理学会 (岡田泰伸会長・理事長)・日本解剖学会 (内山安男理事長)・日本薬理学会 (成宮 周理事長) の会長・理事長の 4 名が当時の政権政党である民主党および文部科学省へ「基礎医学教育・研究の活性化に対する要望書」を提出した。

3 月 31 日には社員総会を開催し, 有限責任中間法人日本生理学会は一般社団法人日本生理学会 (非営利) に移行し, それに伴い定款の変更が行われた。公益財団法人化に関しては, 公益認定を得るにあたって多くの制約があることから, 学会として引き続き検討を行うことになった。

2010 年の総会では, 小澤瀨司氏が特別会員に推薦された。さらに, 2019 年に開催される第 9 回 FAOPS 大会を招致するか議論が行われ, 2019 年第 97 回日本生理学会大会と合同開催であること

を条件に招致を行うことになった。

同年, 第 87 回大会が 5 月 19 日から 21 日に盛岡市で開催された。

2000 年代後半には, 研究倫理をめぐるさまざまな問題・事件が頻発した。また, 産官学連携による研究の進展により利益相反問題に誠実に対応する必要性が明白になった。さらに, ヒトを対象とした医学系研究についても適切に対応する必要が生じた。生理学会としてもこれらの問題に適切に対応するため, 2009 年には日本医学会主催の利益相反シンポジウムへ参加し, 研究倫理委員会・執行部で検討を重ねた。そして新たに利益相反委員会の設立を検討することになった。さらに, 大会発表時には, 従来の動物を対象とした研究のみならずヒトを対象とした生理学研究についての機関審査の有無, および利益相反関係の開示を求めることとし, 2011 年から適用することになった。

2010 年には特別会員の岩間吉也氏が逝去された。

2011 (平成 23) 年は, 東京で開催される日本医学会総会に合わせ, 初めて日本解剖学会と共同で, 第 116 回日本解剖学会総会・全国学術集会との合同大会として第 88 回大会を横浜で実施することが企画され, 東京都内の 4 大学が運営準備を行っていた。しかし, 大会直前の 3 月 11 日に発生した東日本大震災により大会現地開催は中止となり, JPS に掲載された抄録による誌上開催に変更された。また, 実施されなかった懇親会費を参加予定者に返還するのではなく, 東北地方被災者への支援を実施することが審議, 決定された。義援金については, 被災東北三県の会員と教育・研究機関を対象として, 生理学会大会参加登録費の返還, 実習器機等の破損に対する修理/更新費用への支援が行われた。また, 寄せられた義援金に残金が発生したため, その後もその趣旨を生かした形の支援事業として生理学会大会 (地方会を含む) への参加登録費の返還が継続された。さらに, その後に発生した 2016 (平成 28) 年の熊本地震等の自然災害に遭遇した被災会員に対しても, 同様の支援活動が行われてきた。

2011年には2019年開催の第9回FAOPS招致に向け、招致準備委員会が設立され、招致業務が開始された。

同年、次期会長選挙が初めて電子投票で実施され、選挙の結果、栗原 敏氏が最終候補者に選出され、その後の第2回常任幹事会で満場一致で承認された。これ以降の地区別幹事（理事）選挙および次期理事長選挙は、全て電子投票で実施されている。

同年12月10日に行われた第3回常任幹事会では、会員減少対応と学会財政健全化の議論が行われ、医学部・歯学部・薬学部以外の会員獲得を目指すことになった。財政健全化については会費徴収率の改善、幹事会の回数減少、事務局の外部委託等の検討を行うことになった。また、生理学エデュケーター制度の確立を目指して、エデュケーター認定委員会が発足した。

また、9月11日から14日まで第7回FAOPS大会が台湾・台北市で開催され、その際の総会において2019年第9回FAOPS大会が日本で開催されることが決まった。

同年、特別会員の中間一郎、高橋國太郎の両氏が逝去された。

2012（平成24）年は第89回大会が3月28日から30日まで松本市で2年ぶりに対面方式で開催された。大会で実施されたシンポジウム内容をSymposiaとして日本生理学雑誌に掲載することになり、シンポジウムオーガナイザーに執筆依頼が行われた。同企画は2015年まで継続された。

大会時の総会においては6名の副会長、2名の監事による新体制案が提案され、承認された。それに伴い、5名の副会長を常任幹事に選出することが提案され、承認された。また、脳科学連合への日本生理学会の参加について、経済的負担がないことなどの条件つきで加盟することが決まった。さらに第9回FAOPS大会組織委員会が鍋倉淳一氏を委員長として発足した。

同年、東京都文京区本郷にあった事務局が新宿区信濃町の国際医学情報センター（IMIC）内に移転し、事務局業務をIMICに委託することになった。

た。この際、会員データの引継ぎに伴う会員情報の整理、会費納入状況確認等、多くの作業が必要であることが明らかになった。また、旧事務局内に保管されていた日本生理学雑誌、生理学餘外集、日本生理学評論等の生理学関係雑誌バックナンバーや事務書類等の古い資料の扱いについて検討を行うことになった。

2012年には特別会員の酒井敏夫、中山 沃、銭場武彦の各氏が、また、名誉会員のSir Andrew Huxley氏が逝去された。

2013（平成25）年は3月27日より29日まで東京都で第90回大会が開催された。新たに教育委員会による教育プログラムが大会中に実施され、多くの会員が参加した。

大会時に開催された総会では、会長、副会長の呼称を理事長、副理事長とすること、常任幹事も理事となることが定まった。また、懸案となっていた旧事務局保管資料は三菱倉庫に保管し、必要に応じて整理を実施することになった。同年には、特別会員の菅野義信、河村洋二郎の両氏が逝去された。

同年7月21日から26日まで、英国バーミンガムで第37回IUPS世界大会が開催され、205名の日本生理学会員が参加した。その際開催された総会にて御子柴克彦氏がCouncil Memberに選ばれた。

2014（平成26）年は3月16日より18日まで鹿児島市で第91回大会が開催された。

大会時に実施された社員総会で、2011年よりエデュケーター認定委員会により検討が続けられてきたエデュケーター認定制度が承認された。そして、教育委員会と生理学エデュケーター認定制度委員会の共同事業として、生理学エデュケーター出願受付を7月に実施した。審議の結果、同年12月に251名の出願申請が可とされ、登録手続きを行ったものに対して「生理学エデュケーター」を認定し、認定者のうち希望した者の氏名を学会HP上に掲載した。





図 19. 学会ロゴマーク (左) とマスコットマーク (右)

2015 (平成 27) 年は 3 月 21 日より 23 日の間、神戸市において第 120 回日本解剖学会総会・全国学術集会との合同大会として第 92 回大会が開催された。この大会では MD 研究者育成プログラムが実施され、その際、学部生ポスター発表も実施された。また、生理学教育への貢献に対する大内一夫氏 (カエル捕り名人) への感謝状授与を、大会中に行われた定時社員総会時に行った。また、3 月 20 日に行われた理事会にて、丸中良典氏が次期理事長に選ばれた。同年、学会 HP の改定が実施され、見やすく分かりやすいものになった。それに際して、従来の学会ロゴマークに加えてより親しみやすいマスコットマークが制定された (図 19)。

同年 11 月 22 日から 25 日まで第 8 回 FAOPS 大会がタイのバンコクで開催され、100 名以上の日本生理学会員が出席した。その際の FAOPS 総会で久保義弘氏が 2nd Vice President に選ばれた。

同年には特別会員の入来正躬氏が逝去された。

2016 (平成 28) 年は 3 月 22 日から 24 日まで札幌市において第 93 回大会が開催された。

その際実施された理事会にて新執行部として 6 名の副理事長就任が承認された。同年、JPS の Impact Factor は初めて 2.0 を上回った。また JPS オープンアクセス化を進めると共に経費節減の目

的で冊子体発行部数を減らすことの検討がはじまった。

2017 (平成 29) 年は 3 月 28 日から 30 日まで第 94 回大会が浜松市で開催された。日本生理学雑誌は季刊となり、従来どおり Web 版および紙媒体の発行を行うことになった。同年、名誉会員 Robert G. Schmidt 氏と特別会員佐々木和夫氏が逝去した。同年、第 38 回 IUPS 世界大会が、8 月 1 日から 5 日まで、ブラジルのリオ・デ・ジャネイロにて開催され、30 名程度の日本生理学会会員が参加した。

その際開催された総会にて久保義弘氏が Council Member に選ばれた。

2018 (平成 30) 年は 3 月 28 日から 30 日まで第 95 回大会が高松市で実施された。この年は第 9 回 FAOPS 大会開催前年であり、海外からの参加者数が増加した。また、次代を担う優秀な高校生に対して生理学に興味をもってもらうための初めての試みとして高校生によるポスター発表が実施され、香川県内のみならず、全国の高校生が発表を行い、活気のある企画になった。優秀演題発表に対しては表彰が行われた。

総会では岡田泰伸氏、栗原 敏氏が特別会員に推薦された。新たに生理学用語集刊行を目的とす



る委員会が設立され、佐久間康夫氏が委員長に就任した。また、日本生理学雑誌のバックナンバーの Web 化を行う方向性が承認された。さらに、留学、長期の病氣療養、妊娠・出産・育児・介護を理由とする正会員を対象に休会を認める制度がはじまった。なお、同年より学会で使用する年号を西暦表記とすることになった。

JPS の冊子体発行は 2018 年から基本的に廃止となり、電子ジャーナルのみの刊行に移行した。評議員に対しては閲覧パスワードを附与し、従来通り JPS を無料で閲覧できる特典を継続することになった。

2019 (平成 31, 令和元) 年は 3 月 28 日から 30 日まで、第 96 回日本生理学会大会との共催で、第 9 回 FAOPS 大会が鍋倉淳一氏を大会長として、神戸市で開催された。

参加者は過去最大の 2,251 人に達し、Plenary Lectures 3 題 (L. Buck, D. Julius, Y. Ohsumi), Special Lectures 9 題 (Y. Miyashita, H. Cheng, U. Oh, R.G. Carroll, M. Yanagisawa, G.D. Lamb, L. Bennet, J.Y.H. Chan, H. Okano), シンポジウム 83, さらにポスター発表として一般演題 1,106 題, PSJ Awards 演題 9 題, Young Scientists Travel Awards 演題 41 題の発表が行われた。教育企画としては、Tutorial for Physiologist 1 題, また日本語で 2 題の教育講演が行われた。また、高校生向けアウトリーチ企画として Spring Science Program for Children が大阪大学国際医工学情報センターおよび臨床医工学「コンソーシアム関西」との共催で実施された。さらに、日本体力医学会との協働企画として、スケートの小平奈緒選手と結城匡啓コーチ (信州大学教授) によるスポーツ生理学に関する特別講演が行われた。

関連行事としては、2 つのテクニカルワークショップ, 10 ランチョンセミナー, およびその時点で 2021 年第 10 回 FAOPS 大会開催国に決まっていたイラン生理学・薬理学会が主催するイランランチが開催された。サテライト企画としては、大会前日から 2 日間にわたり、FAOPS2019 & ADInstruments Teaching Workshop が大会会場

にて、また、大会終了後の 4 月 1 日から 5 日に岡崎市の生理学研究所において NIPS/Thermal Biology Training Course が実施された。

市民公開講座としては 3 月 31 日に小倉明彦大阪大学名誉教授による「料理生理学入門」が行われた。

FAOPS 総会では、新たに久保義弘氏が Secretary-General に選ばれた。

同年 12 月 6 日付で日本生理学会の学会活動と関係がない行為を「日本生理学会」の名の下に行うことを防ぐことを目的として「日本生理学会」を商標登録した。

2020 (令和 2) 年は別府市において第 97 回大会が開催される予定だったが、同年 1 月から全世界に瞬く間に広まった新型コロナウイルス感染症拡大により JPS に掲載された抄録による完全誌上開催に変更された。また、第 1 回理事会および臨時理事会、評議員会・総会は東京で対面・オンラインのハイブリッド形式で行われた。そして石川義弘氏の理事長、および成瀬恵治、上田陽一、赤羽悟美、南沢 亨、久保義弘氏の副理事長選任が行われた。また、2023 年の第 100 回大会時に記念事業を行うことを目的として、100 周年記念事業委員会の設立が決まった。また、人格なき社团「日本生理学会大会」規約の陳腐化に伴い、内容の変更が行われた。さらに一般社団法人日本生理学会の定款内に本学会の主事業に「教育」を追加することになった。また、この年、終身会費一括納入により退職後の会費負担を軽減することを目的とした、終身会員制度を制定することが決まった。

JPS は 2020 年第 70 巻からフルオープンアクセスジャーナルとなり、誰もが無料で論文を閲覧することが可能になった。また、JPS 掲載料について、学会員・評議員に対して補助を行うことを検討することが決定した。

同年、特別会員の星 猛氏が逝去された。

2021 (令和 3) 年も新型コロナウイルス感染症流行は継続し、第 126 回日本解剖学会総会・全国学術集会と合同大会として企画された第 98 回大

会は、当初名古屋市で開催される予定だったが、最終的には Web のみの開催となった。3 月 28 日から 30 日はポスター発表も含めてライブ録画を配信し、その後 4 月 5 日から 5 月 10 日までライブ録画のオンデマンド配信が行われ、Web の利点を活かした運営が行われた。

この年から終身会員制度が始まり、64 歳以上かつ 10 年以上正会員を務めた者が一定の会費をまとめて支払うと、それ以後の会費が免除されることになった。同年には 6 名の会員から申請があり、総会で承認された。

同年には、日本生理学会 100 周年記念事業としてマスコットキャラクター制定、学会 HP 上での記念事業特集ページ開設および同ページにおいての 100 周年カウントダウンが開始された。

2022（令和 4）年の第 99 回大会は 3 月 16 日から 18 日まで仙台市において、新型コロナウイルス感染症に対する行動規範の変化に伴い、対面および Web でのハイブリッド方式により実施された。本大会では、記念講演・特別講演・シンポジウム等は基本的には会場で実施し同時に動画を配信、また、一般口演およびポスターは動画を配信して、その後各演題についての質疑応答を行った。なお、3 月 16 日深夜に福島県沖を震源とした地震の発生により仙台市でも震度 5 強を観測したため、翌 17 日プログラムの一部変更が行われたが、最終日までプログラムが実施された。なお、地震により東北新幹線が不通になったことへの対応として、大会終了 18 日に貸し切りバスによる参加者の東京への振替輸送が行われた。

また、2022 年には、本来は前年に開催予定であった第 39 回 IUPS 世界大会が、5 月 7 日から 11 日まで、中国を主催国としてオンラインで実施された。総会では久保義弘氏が 2nd Vice president に、また岡村靖幸氏が Council member に選ばれた。

同年、7 月 10 日が「生理学の日」として日本記念日協会に登録をされた。これは 1922（大正 11）年 7 月 10 日に日本生理学会第 1 回大会が東京帝国大学医学部にて開催され、2022 年に 100 年を迎え

たことを記念するとともに、生理学研究をより広く知ってもらう機会とすることが目的とされた。

2023（令和 5）年の第 100 回記念大会は 3 月 14 日から 16 日まで京都市で開催された。山中伸弥教授（京都大学 iPS 細胞研究所：2012 年ノーベル生理学・医学賞受賞）が「iPS 細胞研究の現状と医療応用に向けた取り組み」、Svante Pääbo 教授（ドイツ・マックスプランク人類進化研究所・沖縄科学技術大学院大学：2022 年ノーベル生理学・医学賞受賞）が“Archaic Genomic”と、Bente Pedersen 教授（デンマーク・コペンハーゲン大学）が“Exercise as medicine in a translational perspective”と題してそれぞれプレナリー講演を行った。また、Sidonia Fagarasa、岡野栄之、箕越靖彦、斎藤通紀、狩野方伸、上田泰己の各氏による特別講演が行われた。さらに 61 のシンポジウムに 282 演題、教育講演 3 演題、モデル講義 4 演題、一般演題 732 演題に Late Breaking Abstract 95 演題、高校生発表 38 演題が行われ、大会参加者は計 2,249 名（一般会員 1,071 名、非会員 269 名、大学院生 345 名、学部生 260 名、高校生 146 名、招待演者 158 名）を数え、過去最大級の規模の大会になった。また、100 周年記念展示としてこれまでの日本生理学会の歴史を振り返るため（1）パネル展示、（2）代表的な実験手法の発展の歴史に関するスライドショー、（3）歴史的な実験機器展示が行われた。さらに 2023 年 3 月 11 日（土）に、100 回記念大会の市民講座「100 年後の人類は？」が開催され、第一部では三浦恭子、砂川玄志郎、牛場潤一各氏による講演が、第二部では第一部講演者に加え高校生 3 名、丸山めぐみ（ファシリテーター）、瀬川茂子、樽野陽幸、川口真也の各氏が参加して総合討論が実施された。

第 100 回記念大会にあたり、日本生理学会より「生理学研究における京都宣言」が出され、100 年後の未来に向けて調和と持続性のある社会を作っていく礎になる科学的知見を提供し続けるための研究を生理学会員が行っていくことを誓った。記念大会終了後には会員限定で第 100 回記念大会の講演アーカイブ動画が公開された。

同年3月13日に実施された理事会において新たに久保義弘氏が次期理事長に指名され、社員総会にて承認された。また、長らく懸案となっていた医学部以外の領域に所属する会員を対象とした特別幹事制度を新設することが認められ、生理学会のすそ野拡大と会員獲得に向けた取り組みが本格化した。

同年1月には100周年記念事業の一環としてコミュニケーションマークが公開され、6月には日本生理学雑誌全巻が電子化され学会HPに掲載された。これにより、日本生理学会が発行してきた全ての英文・和文機関誌の電子化・公開化が完了した。

## 日本生理学会大会記念写真一覧

【発会準備会】1922年 京都



第1列 同って左より、石川日出雄丸、酒井卓造、藤田敏彦、生田豊六、木下重作、天宮千鶴、石原謙、高安慎一、佐武安太郎、  
第2列自左には、栗田源次、林智蔵、松田政孝、湯本政二郎、牧亮吉、大塚謙吉、久保盛雄、正崎保之助、  
第3列には、藤義孝、渡部謙、中塚嘉一、西丸和義諸先生の姿が見える。

【第3回】1924年 仙台



第3回 日本生理学会大会  
大正13年(1924)7月 東北大

【第1回】1922年 東京



第1回 日本生理学会大会懇親会  
大正11年(1922)7月 東京

【第4回】1925年 奉天（現瀋陽市）



第4回 日本生理学会大会  
大正14年(1925)8月 満洲国奉天

【第2回】1923年 福岡



第2回 日本生理学会大会  
大正12年(1923)4月 大分

【第5回】1926年 東京



第5回 日本生理学会大会  
大正15年(1926) 東京



【第6回】1927年 岡山



【第9回】1930年 大阪



【第7回】1928年 京都



【第10回】1931年 長崎



【第8回】1929年 札幌



【第11回】1932年 新潟



【第13回】1934年 東京



【第16回】1937年 名古屋



【第14回】1935年 京城（現ソウル）



【第17回】1938年 京都



【第15回】1936年 倉敷



【第18回】1939年 熊本



【第19回】1940年 千葉



【第23回】1946年 仙台



【第20回】1941年 台北



【第24回】1947年 大阪



【第22回】1943年 福岡



【第25回】1948年 新潟





【第26回】1949年 京都



【第29回】1952年 札幌



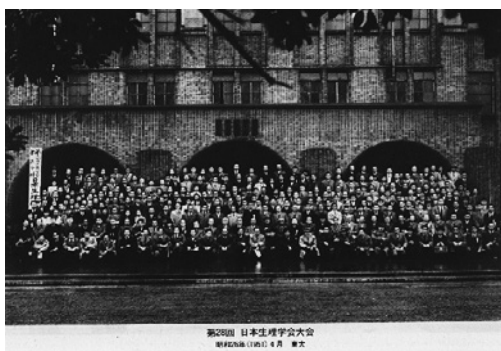
【第27回】1950年 広島



【第30回】1953年 福岡



【第28回】1951年 東京



【第31回】1954年 名古屋

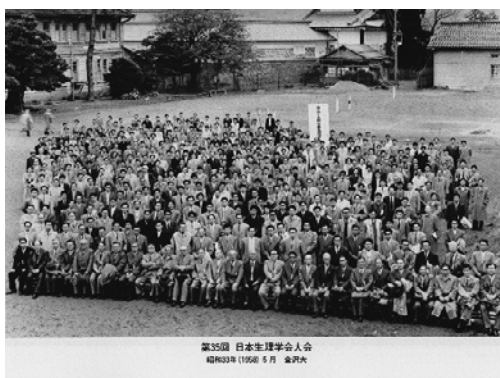




【第32回】1955年 京都



【第35回】1958年 金沢



【第33回】1956年 岡山



【第36回】1959年 東京



【第34回】1957年 神戸



【第37回】1960年 徳島



【第38回】1961年 京都



【第41回】1964年 千葉



【第39回】1962年 弘前



【第42回】1965年 岐阜



【第40回】1963年 大阪



【第43回】1966年 松本





【第44回】1967年 名古屋



【第47回】1970年 東京



【第45回】1968年 熊本



【第48回】1971年 東京



【第46回】1969年 米子



【第49回】1972年 盛岡



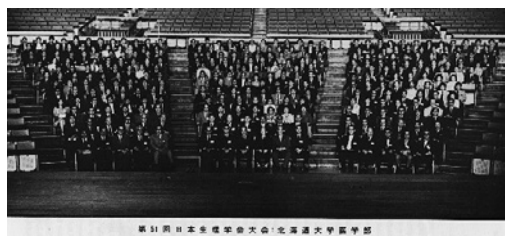
【第50回】1973年 福岡



【第53回】1976年 仙台



【第51回】1974年 札幌



【第54回】1977年 鹿児島



【第52回】1975年 津



【第55回】1978年 新潟





【第56回】1979年 東京



【第59回】1982年 横浜



【第57回】1980年 神戸



【第60回】1983年 大阪



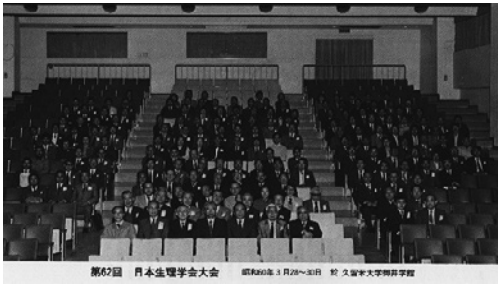
【第58回】1981年 徳島



【第61回】1984年 前橋



【第62回】1985年 久留米



【第65回】1988年 和歌山



【第63回】1986年 山形



【第66回】1989年 岡山



【第64回】1987年 千葉



【第67回】1990年 宮崎



【第 68 回】1991 年 京都



【第 71 回】1994 年 高松



【第 69 回】1992 年 秋田



【第 72 回】1995 年 名古屋



【第 70 回】1993 年 甲府



【第 73 回】1996 年 福井





【第74回】1997年 浜松



【第77回】2000年 横浜



【第75回】1998年 金沢



【第78回】2001年 京都



【第76回】1999年 長崎



【第79回】2002年 広島





【第80回】2003年 福岡



【第83回】2006年 前橋



【第81回】2004年 札幌



【第85回】2008年 東京



【第95回】2018年 高松



## 発行誌一覧

—和文誌—

■日本生理学雑誌

巻	発行年	発行号数	編集長	印刷所
1	1936~7	5	戸塚武彦	三秀舎
2	1937	5	戸塚武彦	三秀舎
3	1938	6	戸塚武彦	三秀舎
4	1939	6	戸塚武彦	三秀舎
5	1940	4	戸塚武彦	三秀舎
6	1941	7	戸塚武彦	三秀舎
7	1942	12	戸塚武彦	三秀舎
8	1943	12	戸塚武彦	文友社
9	1944	11	戸塚武彦	文友社
出版元変更 (岩波書店 ⇒ 日本出版配給)				
10	1946~8	12	戸塚武彦	鶴岡印刷
11	1948~9	10	戸塚武彦	鶴岡印刷
12	1950	12	戸塚武彦	鶴岡印刷
13	1951	12	戸塚武彦	鶴岡印刷
14	1952	12	戸塚武彦	鶴岡印刷
15	1953	12	戸塚武彦	鶴岡印刷
16	1954	12	戸塚武彦	鶴岡印刷
17	1955	12	戸塚武彦	鶴岡印刷
18	1956	12	戸塚武彦	鶴岡印刷
19	1957	12	戸塚武彦	鶴岡印刷
20	1958	12	戸塚武彦	鶴岡印刷
21	1959	12	戸塚武彦	鶴岡印刷
22	1960	12	戸塚武彦	鶴岡印刷
23	1961	12	戸塚武彦	鶴岡印刷
24	1962	12	戸塚武彦	鶴岡印刷
25	1963	12	戸塚武彦	鶴岡印刷
26	1964	12	内菌耕二	鶴岡印刷
27	1965	12	内菌耕二	鶴岡印刷
28	1966	12	内菌耕二	鶴岡印刷
29	1967	12	内菌耕二	鶴岡印刷
30	1968	12	内菌耕二	鶴岡印刷
31	1969	12	真島英信	鶴岡印刷
32	1970	12	真島英信	鶴岡印刷
33	1971	12	真島英信	鶴岡印刷
34	1972	12	塚田裕三	鶴岡印刷
35	1973	12	塚田裕三	鶴岡印刷
36	1974	12	塚田裕三	鶴岡印刷
37	1975	12	塚田裕三	鶴岡印刷
38	1976	12	塚田裕三	鶴岡印刷
39	1977	12	塚田裕三	鶴岡印刷
40	1978	12	塚田裕三	鶴岡印刷
41	1979	12	塚田裕三	鶴岡印刷

巻	発行年	発行号数	編集長	印刷所
42	1980	12	塚田裕三	鶴岡印刷
43	1981	12	酒井敏夫	鶴岡印刷
44	1982	12	酒井敏夫	鶴岡印刷
45	1983	12	酒井敏夫	鶴岡印刷
46	1984	12	酒井敏夫	鶴岡印刷
47	1985	12	酒井敏夫	鶴岡印刷
48	1986	12	酒井敏夫	鶴岡印刷
49	1987	12	酒井敏夫	鶴岡印刷
50	1988	12	酒井敏夫	鶴岡印刷
51	1989	12	酒井敏夫	鶴岡印刷
52	1990	12	酒井敏夫	鶴岡印刷
53	1991	12	酒井敏夫	鶴岡印刷
54	1992	12	酒井敏夫	鶴岡印刷
55	1993	12	金子章道	鶴岡印刷
56	1994	12	金子章道	鶴岡印刷
57	1995	12	金子章道	鶴岡印刷
58	1996	12	金子章道	鶴岡印刷
59	1997	12	金子章道	鶴岡印刷
60	1998	12	金子章道	鶴岡印刷
61	1999	12	金子章道	鶴岡印刷
62	2000	12	金子章道	鶴岡印刷
63	2001	12	金子章道	杏林舎
64	2002	12	岡田泰伸	杏林舎
65	2003	12	岡田泰伸	杏林舎
66	2004	12	岡田泰伸	杏林舎
67	2005	12	岡田泰伸	杏林舎
68	2006	12	小西真人	杏林舎
69	2007	12	小西真人	杏林舎
70	2008	12	小西真人	杏林舎
71	2009	12	小西真人	杏林舎
72	2010	12	小西真人	杏林舎
73	2011	12	小西真人	杏林舎
74	2012	6	多久和典子	杏林舎
75	2013	6	多久和典子	杏林舎
76	2014	6	多久和典子	杏林舎
77	2015	6	多久和典子	杏林舎
78	2016	6	上田陽一	杏林舎
79	2017	6	上田陽一	杏林舎
80	2018	4	上田陽一	杏林舎
81	2019	4	上田陽一	杏林舎
82	2020	4	上田陽一	杏林舎
83	2021	4	上田陽一	杏林舎

—欧文誌—

■ The Journal of Physiological Sciences (JPS)  
〔旧名：The Japanese Journal of Physiology (JJP)〕

Volume	Year	Number of Issue	Editor in Chief
1	1950～1	4	Hisashi Kuno
2	1951～2	4	Hisashi Kuno
3	1952～3	4	Hisashi Kuno
4	1954	4	Hisashi Kuno
5	1955～6	4	Hisashi Kuno
6	1956	4	Hisashi Kuno
7	1957	4	Hisashi Kuno
8	1958	4	Hisashi Kuno
9	1959	4	Hisashi Kuno
10	1960	6	Hisashi Kuno
11	1961	6	Hisashi Kuno
12	1962	6	Hisashi Kuno
13	1963	6	Hisashi Kuno
14	1964	6	Hisashi Kuno
15	1965	6	Hisashi Kuno
16	1966	6	Hisashi Kuno
17	1967	6	Hisashi Kuno
18	1968	6	Hisashi Kuno
19	1969	6	Hisashi Kuno
20	1970	6	Hisashi Kuno
21	1971	6	Hisato Yoshimura
22	1972	6	Hisato Yoshimura
23	1973	6	Yasuji Katsuki
24	1974	6	Yasuji Katsuki
25	1975	6	Kichiya Iwama
26	1976	6	Kichiya Iwama
27	1977	6	Akira Watanabe
28	1978	6	Akira Watanabe
29	1979	6	Hidenobu Mashima
30	1980	6	Hidenobu Mashima
31	1981	6	Hiroshi Irisawa
32	1982	6	Hiroshi Irisawa
33	1983	6	Sosogu Nakayama
34	1984	6	Sosogu Nakayama
35	1985	6	Takeshi Hoshi
36	1986	6	Takeshi Hoshi
37	1987	6	Yoshiyuki Honda
38	1988	6	Yoshiyuki Honda
39	1989	6	Chikara Hiroshige
40	1990	6	Chikara Hiroshige
41	1991	6	Akimichi Kaneko
42	1992	6	Akimichi Kaneko

Volume	Year	Number of Issue	Editor in Chief
43	1993	6	Akimichi Kaneko
44	1994	6	Akimichi Kaneko
45	1995	6	Akimichi Kaneko
46	1996	6	Hiroyuki Suga
47	1997	6	Hiroyuki Suga
48	1998	6	Hiroyuki Suga
49	1999	6	Hiroyuki Suga
50	2000	6	Hiroyuki Suga
51	2001	6	Akinori Noma
52	2002	6	Akinori Noma
53	2003	6	Akinori Noma
54	2004	6	Akinori Noma
55	2005	6	Akinori Noma
誌名，出版元変更			
56	2006	6	Yasunobu Okada
57	2007	6	Yasunobu Okada
58	2008	7	Yasunobu Okada
出版元変更			
59	2009	6	Yasuo Sakuma
60	2010	6	Yasuo Sakuma
61	2011	6	Yasuo Sakuma
62	2012	6	Yasuo Sakuma
63	2013	6	Yasuo Sakuma
64	2014	6	Yoshihiro Ishikawa
65	2015	6	Yoshihiro Ishikawa
66	2016	6	Yoshihiro Ishikawa
67	2017	6	Yoshihiro Ishikawa
冊子体印刷終了			
68	2018		Yoshihiro Ishikawa
69	2019		Yoshihiro Ishikawa
70	2020		Yoshihiro Ishikawa
71	2021		Makoto Tominaga

## 歴代理事長/歴代常任幹事一覧

常任理事	令和 4～6 年	令和 2～4 年	平成 30～令和 2 年
	R4.3.17～R.6.3	R2.3.18～R4.3.17	H30.3.29～R2.3.18
<b>理事長</b> <b>副理事長</b> (財務担当) <b>副理事長</b> (編集・広報担当) <b>副理事長</b> (教育担当) <b>副理事長</b> (学術・研究担当) <b>副理事長</b> (庶務担当) <b>副理事長</b> (国際担当)	石川 義弘 成瀬 恵治 上田 陽一 南沢 享 赤羽 悟美 平野 勝也/南沢 享 久保 義弘	石川 義弘 成瀬 恵治 上田 陽一 南沢 享 赤羽 悟美 平野 勝也/南沢 享 久保 義弘	丸中 良典 石川 義弘 上田 陽一 南沢 享 赤羽 悟美 渡辺 賢 久保 義弘
北海道地区	田中 真樹 大場 雄介	長峯 隆 田中 真樹	柏柳 誠 (～2019.7.17 逝去) 長峯 隆
東北地区	藤井 聡 尾野 恭一	蔵田 潔 藤井 聡	八尾 寛 蔵田 潔
関東地区	安西 尚彦 船橋 利也 椎橋 実智男 尾仲 達史 鯉淵 典之	白尾 智明 高橋 倫子 (～2020.3 入来先生後任) 安西 尚彦 船橋 利也 椎橋 実智男	尾仲 達史 黒澤 美枝子 渡辺 修一 入来 篤史 (～2020.3.17 異動のため) 白尾 智明
東京地区	横山 詩子 竹森 重 堀田 晴美 内田 さえ 宮田 麻理子	加藤 總夫 小西 真人 横山 詩子 竹森 重 堀田 晴美	林 由起子 狩野 方伸 渋谷 まさと 加藤 總夫 小西 真人
中部地区	久場 博司 橋谷 光 佐藤 元彦 富永 真琴 山中 章弘	中村 和弘 酒井 秀紀 浦野 哲盟 久場 博司 橋谷 光	中島 昭 福田 敦夫 中村 和弘 酒井 秀紀 浦野 哲盟
近畿地区	北澤 茂 西谷 友重 岡村 康司 樽野 陽幸	齋藤 康彦 小山 なつ 北澤 茂 西谷 友重	岡村 康司 伊佐 正 齋藤 康彦 小山 なつ
中国四国地区	満田 憲昭 勢井 宏義 藤原 祐一郎	美津島 大 (～2022.3 平野先生後任) 満田 憲昭 勢井 宏義	田中 潤也 小林 誠 平野 勝也
九州地区	岡部 幸司 富澤 一仁 花田 礼子	桑木 共之 鷹野 誠 岡部 幸司	小野 克重 桑木 共之 鷹野 誠
特別枠	須田 悠紀 (若手) 荒田 晶子 (女性) 林 由起子 (女性)	和田 真 (若手) 尾松 万里子 (女性) 多久和 典子 (女性)	和田 真 (若手) 尾松 万里子 (女性) 多久和 典子 (女性)
国際学会枠			岡村 康司 (～2020.3.17) <sup>※1</sup> 鍋倉 淳一 (～2020.3.17) 富永 真琴 (～2020.3.17)
大会長枠	虫明 元 (2021.3.27～2023.3) 伊佐 正 (2021.3.27～2024.3)	花田 礼子 (～2021.3.27) 小野 克重 (2020.3.18～2021.3.27) 飛田 秀樹 (～2022.3) 虫明 元 (2021.3.27～2023.3) 伊佐 正 (2021.3.27～2024.3)	花田 礼子 (大会長) <sup>※2</sup>
会計監事	柿沼 由彦 河合 佳子 (2022.3.17～2024.3) 渡部 文子	柿沼 由彦 少作 隆子 (2020.3.18～2022.3.17) 渡部 文子	

※1 近畿地区理事兼任。 ※2 2019 年定時社員総会で、就任承認。大会長は、日本生理学会の理事に就任することとなった。



常任幹事 常任理事 (H25より)	平成 28～30 年	平成 26～28 年	平成 24～26 年	平成 22～24 年
	H28.3.22～H30.3.29	H26.3.17～H28.3.22	H24.3～H26.3	H22.5～H24.3
会長 理事長 (H25より)	丸中 良典	栗原 敏	栗原 敏	岡田 泰伸
副会長 副理事長 (財務担当)	石川 義弘	石川 義弘	石川 義弘	川上 順子
副会長 副理事長 (編集・広報担当)	上田 陽一	多久和 典子	多久和 典子	小西 真人
副理事長 (教育担当)	鯉淵 典之	鯉淵 典之	鯉淵 典之	
副理事長 (学術・研究担当)	赤羽 悟美	加藤 總夫	加藤 總夫	
副理事長 (庶務担当)	渡辺 賢	小西 真人	小西 真人	
副理事長 (国際担当)	久保 義弘	久保 義弘	久保 義弘	
北海道地区	船橋 誠 柏柳 誠	當瀬 規嗣 船橋 誠	高井 章 當瀬 規嗣	高井 章 松山 清治
東北地区	藤井 聡 八尾 寛	尾野 恭一 藤井 聡	八尾 寛 尾野 恭一	佐々木 和彦 八尾 寛
関東地区	船橋 利也 澁木 克栄 尾仲 達史 黒澤 美枝子 渡辺 修一	明間 立雄 入来 篤史 白尾 智明 船橋 利也 澁木 克栄	御子柴 克彦 矢田 俊彦 明間 立雄 入来 篤史 白尾 智明	御子柴 克彦 矢田 俊彦 鯉淵 典之 石川 義弘 尾仲 達史
東京地区	柚崎 通介 南沢 享 林 由起子 狩野 方伸 渋谷 まさと	岡野 栄之 竹森 重 持田 澄子 柚崎 通介 南沢 享	狩野 方伸 岡野 栄之 竹森 重 持田 澄子	加藤 總夫 狩野 方伸 本間 生夫 佐久間 康夫 柚崎 通介
中部地区	老木 成稔 井本 敬二 久場 博司 中島 昭 福田 敦夫	富永 真琴 鍋倉 淳一 老木 成稔 井本 敬二 久場 博司	多久和 陽 福田 敦夫 山本 哲朗 富永 真琴 鍋倉 淳一	水村 和枝 久保 義弘 多久和 陽 福田 敦夫 山本 哲朗
近畿地区	前田 正信 北澤 茂 <sup>※3</sup> 岡村 康司 <sup>※4</sup> 伊佐 正	三木 健寿 久野 みゆき 大森 治紀 <sup>※7</sup> 前田 正信	岡村 康司 丸中 良典 三木 健寿 久野 みゆき	岡村 康司 丸中 良典 大森 治紀 前田 正信
中国四国地区	徳田 雅明 田中 潤也 小林 誠	桃 秀人 松井 秀樹 徳田 雅明	小林 誠 桃 秀人 松井 秀樹	河合 康明 田中 潤也 小林 誠
九州地区	井上 隆司 蒔田 直昌 小野 克重	亀山 正樹 井上 隆司 蒔田 直昌	上田 陽一 小野 克重 亀山 正樹	上田 陽一 小野 克重 吉村 恵
特別枠	篠田 陽 (若手) 小川 園子 (女性) 宮田 麻理子 (女性) <sup>※5</sup>	篠田 陽 (若手) 赤羽 悟美 (女性) 小川 園子 (女性)	宇賀 貴紀 黒澤 美枝子 関野 祐子	宇賀 貴紀 黒澤 美枝子 関野 祐子
国際学会枠	岡村 康司 (～2020.3.17) <sup>※6</sup> 鍋倉 淳一 (～2020.3.17) 富永 真琴 (～2020.3.17)			

※3 大森理事の後任。任期は H30.3 まで。 ※4 国際学会枠兼任。 ※5 赤羽先生の後任。任期は H30.3 まで。

※6 近畿地区理事兼任。 ※7 H28.3 まで (本人のご意向により)。

常任幹事	平成 20～22 年会長選	平成 18～20 年	平成 17～18 年	平成 16～18 年	平成 14～16 年
	H20.3.29	H18.3.29～	H17.5.19～	H16.6.3～H18.3.29	H14.3.29
会長 副会長（財務担当） 副会長（編集・広報担当） （教育担当） （学術・研究担当） （庶務担当） （国際担当）	岡田 泰伸 川上 順子 小西 真人	岡田 泰伸 栗原 敏 小西 真人	岡田 泰伸 （会長代行）	金子 章道 本間 生夫 岡田 泰伸	金子 章道 宮崎 俊一 岡田 泰伸
北海道地区	河原 剛一 松山 清治	河原 剛一 赤池 忠		青木 藩 赤池 忠	青木 藩 福島 菊郎
東北地区	佐々木 和彦 丸山 芳夫	香山 雪彦 丸山 芳夫		香山 雪彦 泉井 亮	丸山 芳夫 泉井 亮
関東地区	彼末 一之 白尾 智明 鯉淵 典之 石川 義弘 尾仲 達史	彼末 一之 白尾 智明 明間 立雄 今泉 和彦 洪水 克栄		板東 武彦 城所 良明 明間 立雄 今泉 和彦 洪水 克栄	板東 武彦 城所 良明 野村 正彦 山村 貞夫 貴邑 富久子
東京地区	岡野 栄之 高松 研 本間 生夫 佐久間 康夫 柚崎 通介	小西 真人 高松 研 川上 順子 篠田 義一 持田 澄子		岡野 栄之 佐久間 康夫 本間 生夫 宮下 保司 川上 順子 篠田 義一 持田 澄子	岡野 栄之 佐久間 康夫 本間 生夫 宮下 保司 御子柴 克彦 宮崎 俊一 小西 真人
中部地区	水村 和枝 久保 義弘 曾我部 正博 西条 寿夫 鈴木 光	伊佐 正 福田 敦夫 曾我部 正博 西条 寿夫 鈴木 光		伊佐 正 福田 敦夫 久場 健司 西野 仁雄 水村 和枝	岡田 泰伸 曾我部 正博 久場 健司 西野 仁雄 水村 和枝
近畿地区	高木 都 山下 勝幸 大森 治紀 前田 正信	高木 都 山下 勝幸 松尾 理 丸中 良典		大森 治紀 津本 忠治 松尾 理 丸中 良典	大森 治紀 彼末 一之 高木 都 野間 昭典
中国四国地区	河合 康明 田中 潤也 松井 秀樹	辻岡 克彦 徳田 雅明 松井 秀樹		辻岡 克彦 徳田 雅明 前田 信治	梶谷 文彦 松井 秀樹 前田 信治
九州地区	粟生 修司 亀山 正樹 吉村 恵	粟生 修司 亀山 正樹 小杉 忠誠		今永 一成 吉村 恵 小杉 忠誠	今永 一成 吉村 恵 河南 恵洋
特別枠	少作 隆子 松田 哲也	少作 隆子 松田 哲也		久保 義弘 小泉 周 能勢 博	久保 義弘 小泉 周 能勢 博
IUPS 枠（2009 年まで）	栗原 敏 倉智 嘉久 宮下 保司	栗原 敏 倉智 嘉久 宮下 保司	栗原 敏 岡田 泰伸 倉智 嘉久 宮下 保司	金子 章道 栗原 敏 岡田 泰伸 倉智 嘉久	金子 章道 栗原 敏 岡田 泰伸 倉智 嘉久

常任幹事	平成 11～14 年	平成 8～11 年	平成 5～8 年	平成 2～5 年	昭和 62～ 平成 2 年
	H11.3.29		H5.4.2	H2.3.25	S62.4.2
庶務幹事 会計幹事 編集幹事	本郷 利憲 栗原 敏 金子 章道	本郷 利憲 栗原 敏 金子 章道	本郷 利憲 熊田 衛 金子 章道	伊藤 正男 本郷 利憲 酒井 敏夫	伊藤 正男 本郷 利憲 酒井 敏夫
北海道地区	青木 藩 本間 研一	黒島 晨汎 本間 研一	加藤 正道 数 英世	加藤 正道 広重 力	加藤 正道 広重 力
東北地区	土居 勝彦 丹治 順	佐藤 誠 丹治 順	佐藤 誠 西山 明德	佐藤 誠 西山 明德	佐藤 誠 西山 明德
関東地区	板東 武彦 小澤 澪司 工藤 典雄 中島 祥夫 貴邑 富久子	伊藤 正男 小澤 澪司 工藤 典雄 中島 祥夫 三浦 光彦	伊藤 正男 小澤 澪司 工藤 典雄 中島 祥夫 中野 昭一	(伊藤 正男) 小澤 澪司 工藤 典雄 本田 良行 中野 昭一	熊田 衛 新島 旭 本間 三郎 本田 良行
東京地区	植村 慶一 (金子 章道) 本間 生夫 (栗原 敏) 御子柴 克彦 宮崎 俊一 (本郷 利憲)	植村 慶一 (金子 章道) 熊田 衛 (栗原 敏) 佐藤 昭夫 高橋 國太郎 (本郷 利憲)	植村 慶一 (金子 章道) (熊田 衛) 栗原 敏 佐藤 昭夫 高橋 國太郎 (本郷 利憲)	(酒井 敏夫) 竹内 昭 熊田 衛 塚田 裕三 佐藤 昭夫 高橋 國太郎 (本郷 利憲)	(酒井 敏夫) 竹内 昭 島津 浩 塚田 裕三 (伊藤 正男) 高橋 國太郎 (本郷 利憲) 登坂 恒夫
中部地区	岡田 泰伸 小野 武年 久場 健司 曾我部 正博 西野 仁雄	入来 正躬 小野 武年 熊沢 孝朗 永坂 鉄夫 富田 忠雄	入来 正躬 小野 武年 熊沢 孝朗 永坂 鉄夫 富田 忠雄	入来 正躬 金子 章道 熊沢 孝朗 永坂 鉄夫 富田 忠雄	入来 正躬 金子 章道 入沢 宏 永坂 鉄夫 富田 忠雄
近畿地区	津本 忠治 福田 淳 松尾 理 大森 治紀	津本 忠治 福田 淳 松尾 理 森本 武利	津本 忠治 福田 淳 藤本 守 森本 武利	久野 宗 志賀 健 藤本 守 森本 武利	久野 宗 中馬 一郎 藤本 守 中山 昭雄
中国四国地区	菅 弘之 瀬山 一正 前田 信治	菅 弘之 瀬山 一正 畠瀬 修	菅野 義信 畠瀬 修	堀 泰雄 村上 恵	堀 泰雄 岡田 博匡
九州地区	有田 眞 堀 哲郎 山下 博	有田 眞 堀 哲郎 山下 博	有田 眞 久場 健司 堀 哲郎	石河 延貞 西 彰五郎 堀 哲郎	石河 延貞 西 彰五郎 大村 裕

( ) は常任幹事と地区別幹事を兼任.

常任幹事	昭和 59～62 年	昭和 56～59 年	昭和 53～56 年	昭和 50～53 年	昭和 47～50 年
		S56.4.1	S53.4.2	S50.4.2	S47.5.5
庶務幹事 会計幹事 編集幹事	伊藤 正男 星 猛 酒井 敏夫	伊藤 正男 星 猛 酒井 敏夫	伊藤 正男 星 猛 塚田 裕三	内蔭 耕二 伊藤 正男 塚田 裕三	内蔭 耕二 伊藤 正男 塚田 裕三
北海道地区	加藤 正道 広重 力	加藤 正道 広重 力	加藤 正道 広重 力	加藤 正道 宮崎 英策	伊藤 真次 藤森 間一
東北地区	田崎 京二 西山 明徳	田崎 京二 鈴木 泰三	田崎 京二 鈴木 泰三	田崎 京二 三田 俊定	鈴木 泰三 三田 俊定
関東地区	本郷 利憲 新島 旭 本間 三郎 三浦 光彦	本郷 利憲 新島 旭 本間 三郎 高木 貞敬	川上 正澄 石河 利寛 本間 三郎 高木 貞敬	川上 正澄 新島 旭 本間 三郎 高木 貞敬	勝木 保次 本間 三郎
東京地区	(酒井 敏夫) 竹内 昭 島津 浩 塚田 裕三 (伊藤 正男) 古河 太郎 (星 猛) 真島 英信	(酒井 敏夫) 竹内 昭 島津 浩 塚田 裕三 (伊藤 正男) 古河 太郎 (星 猛) 真島 英信	酒井 敏夫 佐藤 昌康 島津 浩 (塚田 裕三) (伊藤 正男) 古河 太郎 (星 猛) 真島 英信	市岡 正道 (内蔭 耕二) 島津 浩 (塚田 裕三) (伊藤 正男) 名取 礼二 勝木 保次 真島 英信	時実 利彦 (内蔭 耕二) 高橋 恵 (塚田 裕三) (伊藤 正男) 名取 礼二 富田 恒男 真島 英信
中部地区	江橋 節郎 御手洗 玄洋 入沢 宏 永坂 鉄夫 富田 忠雄	内蔭 耕二 御手洗 玄洋 入沢 宏 永坂 鉄夫	内蔭 耕二 御手洗 玄洋 大原 孝吉	高木 健太郎 御手洗 玄洋 宮川 清	高木 健太郎 御手洗 玄洋 大村 裕
近畿地区	久野 宗 中馬 一郎 藤本 守 中山 昭雄	久野 宗 中馬 一郎 藤本 守 岩間 吉也	井上 章 中山 昭雄 岡本 彰祐 岩間 吉也	井上 章 中馬 一郎 岡本 彰祐 岩間 吉也	井上 章 古河 太郎 吉村 寿人 岩間 吉也
中国四国地区	中山 沃 岡田 博匡	中山 沃 及川 俊彦	松本 淳治 及川 俊彦	入沢 宏 丹生 治夫	銭場 武彦 山田 守
九州地区	後藤 昌義 瀬瀬 教三 大村 裕	後藤 昌義 瀬瀬 教三 大村 裕	後藤 昌義 瀬瀬 教三 大村 裕	後藤 昌義 佐藤 昌康	間田 直幹 佐藤 昌康

( ) は常任幹事と地区別幹事を兼任.



常任幹事	昭和 44～47 年	昭和 41～44 年	昭和 38～41 年	昭和 35～38 年	昭和 32～35 年
	S44.4.1				
庶務幹事 会計幹事 編集幹事	時実 利彦 内藺 耕二 真島 英信	松田 幸次郎 内藺 耕二 内藺 耕二	松田 幸次郎 松田 幸次郎 内藺 耕二	若林 勲 松田 幸次郎 戸塚 武彦	若林 勲 若林 勲 戸塚 武彦
北海道地区	宮崎 英策 藤森 聞一	宮崎 英策 望月 政司	永井 寅男 藤森 聞一	伊藤 真次	永井 寅男
東北地区	鈴木 泰三 三田 俊定	和田 正男 三田 俊定	本川 弘一 三田 俊定	本川 弘一 佐藤 熙	本川 弘一 和田 正男
関東地区	本間 三郎 高木 貞敬	本間 三郎 高木 貞敬	鈴木 正夫 高木 貞敬	松本 政雄 鈴木 正夫	松本 政雄 鈴木 正夫
東京地区	(時実 利彦) (内藺 耕二) 高橋 恵 勝木 保次 松田 幸次郎 名取 礼二 富田 恒男 (真島 英信)	時実 利彦 (内藺 耕二) 高橋 恵 勝木 保次 (松田 幸次郎) 名取 礼二 富田 恒男 若林 勲	時実 利彦 (内藺 耕二) 勝木 保次 (松田 幸次郎) 富田 恒男 若林 勲	時実 利彦 (戸塚 武彦) 勝木 保次 (松田 幸次郎) 富田 恒男 (若林 勲)	時実 利彦 (戸塚 武彦) 松田 幸次郎 名取 礼二 富田 恒男 (若林 勲)
中部地区	高木 健太郎 伊藤 竜 宮川 清	高木 健太郎 伊藤 竜 竹中 繁雄	高木 健太郎 伊藤 竜 竹中 繁雄	高木 健太郎 伊藤 竜	伊藤 竜 和合 卯太郎
近畿地区	井上 章 吉井 直三郎 吉村 寿人 岩間 吉也	井上 章 吉井 直三郎 吉村 寿人 岩間 吉也	井上 章 吉井 直三郎 吉村 寿人 鎌倉 勝夫	大谷 卓造 吉井 直三郎 吉村 寿人 細谷 雄二	大谷 卓造 吉井 直三郎 吉村 寿人 細谷 雄二
中国四国地区	西田 勇 山田 守	西田 勇 福原 武	西田 勇 福原 武	福原 武 岡 芳包	西丸 和義 福原 武
九州地区	問田 直幹 佐藤 昌康	問田 直幹 緒方 維弘	問田 直幹 緒方 維弘	問田 直幹 緒方 維弘	問田 直幹 緒方 維弘

( ) は常任幹事と地区別幹事を兼任.

年	昭和 29～32 年	昭和 26～29 年	昭和 21～26 年 <sup>※8</sup>	昭和 17～21 年	昭和 11～17 年	昭和 10～11 年
常任幹事	福田 邦三 戸塚 武彦 林 勲 若林 靖三郎 杉 礼二	福田 邦三 戸塚 武彦 林 勲 若林 靖三郎 杉 礼二	浦本 政三郎 戸塚 武彦 久野 寧 加藤 元一 坂本 嶋嶺 福田 邦三 久保 盛徳 林 勲 鈴木 正夫 若林 勲 杉本 良一 西丸 和義	浦本 政三郎 戸塚 武彦 久野 寧 加藤 元一 坂本 嶋嶺	橋田 邦彦 浦本 政三郎 戸塚 武彦 久野 寧	橋田 邦彦 浦本 政三郎 戸塚 武彦
北海道地区	箕島 高 天野 智恵美					
東北地区	本川 弘一 和田 正男					
関東・新潟地区	鈴木 正夫 高木 健太郎					
中部地区	和合 卯太郎 伊藤 竜					
近畿地区	大谷 卓造 久保 秀雄					
中国四国地区	林 香苗 西丸 和義					
九州地区	瀬尾 愛三郎 小玉 作治					

※8 昭和 23（1948）年，大日本生理学会から日本生理学会に名称変更。

## 特別会員一覧（50 音順）

○は 2022 年現在の特別会員

朝比奈一男	勝 義孝	鈴木 正夫	藤森 聞一
東 竜太郎	勝木 新次	瀬尾愛三郎	古河 太郎
板垣 政参	加藤 元一	銭場 武彦	星 猛
石河 延貞	瀬瀬 教三	高木 健太郎	本郷 利憲
市岡 正道	金子 章道○	高木 貞敬	本田 良行
伊藤 真次	河村洋二郎	竹中 繁雄	本間 三郎
伊藤 正男	久野 寧	中馬 一郎	松下 宏
伊藤 龍	久保 盛徳	塚田 裕三	松田幸次郎
井上 章	久保 秀雄	問田 直幹	松本 淳治
井上 清恒	栗原 敏○	戸塚 武彦	丸中 良典○
入来 正躬	黒津 敏行	富田 忠雄	三田 俊定
岩瀬 善彦	幸塚 嘉一	長嶋 長節	簗島 高
岩間 吉也	児玉 作治	鈴木 達二	宮本 博司
内蘭 耕二	後藤 昌義	須田 勇	望月 政司
内山 孝一	斎藤幸一郎	中西 政周	森 信胤
江橋 節郎	酒井 敏夫	中村 治男	山極 一三
及川 俊彦	坂本 嶋嶺	中山 沃	山田 守
大村 裕○	佐藤 昭夫	永井 寅雄	横山 正松
岡 芳包	佐藤 謙助	名取 礼二	吉井直三郎
岡田 博匡	佐藤 晶康	西田 勇	吉村 寿人
岡田 泰伸○	島津 浩	西丸 和義	若林 勲
岡本 彰祐	菅野 義信	福田 邦三	
緒方 維弘	杉 靖三郎	福田 篤郎	
小澤 澪司○	鈴木 達二	福原 武	

## 名誉会員

---

( ) は在任期間

---

John Carew Eccles (1980-1997)

Ichiji Tasaki (1985-2009)

Chandler McCuskey Brooks (1985-1989)

Akira Arimura (1997-2007)

Charles Edwards (1997-)

Eckhart Simon (1997-)

Edward Perl (1997-2014)

Robert Franz Schmidt (1997-2017)

Thomas Bolton (1999-2024)

Wolfgang Trautwein (1999-2011)

Kiyomi Koizumi (1999-)

Denis Noble (1999-)



# 1965 年以降の会員数の推移

西暦	和暦	会員数
1965	昭和 40	1,565
1966	昭和 41	1,697
1967	昭和 42	1,670
1968	昭和 43	1,796
1969	昭和 44	1,880
1970	昭和 45	1,886
1971	昭和 46	1,928
1972	昭和 47	1,938
1973	昭和 48	2,044
1974	昭和 49	2,129
1975	昭和 50	2,188
1976	昭和 51	2,236
1977	昭和 52	2,356
1978	昭和 53	2,451
1979	昭和 54	2,817
1980	昭和 55	2,904
1981	昭和 56	2,855
1982	昭和 57	2,916
1983	昭和 58	2,953
1984	昭和 59	2,981
1985	昭和 60	3,055
1986	昭和 61	3,110
1987	昭和 62	3,183
1988	昭和 63	3,285
1989	昭和 64/平成元	3,318
1990	平成 2	3,394
1991	平成 3	3,429
1992	平成 4	3,437
1993	平成 5	3,437

西暦	和暦	会員数
1994	平成 6	3,426
1995	平成 7	3,443
1996	平成 8	3,324
1997	平成 9	3,317
1998	平成 10	3,271
1999	平成 11	3,206
2000	平成 12	3,221
2001	平成 13	3,245
2002	平成 14	3,223
2003	平成 15	3,186
2004	平成 16	3,171
2005	平成 17	3,103
2006	平成 18	3,139
2007	平成 19	2,992
2008	平成 20	2,938
2009	平成 21	2,778
2010	平成 22	
2011	平成 23	
2012	平成 24	2,768
2013	平成 25	2,884
2014	平成 26	2,916
2015	平成 27	
2016	平成 28	
2017	平成 29	
2018	平成 30	
2019	平成 31/令和元	
2020	令和 2	
2021	令和 3	

# 大会の記録



## 第 100 回日本生理学会記念大会の概要

第 100 回日本生理学会記念大会は 2023 年 3 月 14 日から 16 日に京都国際会館で対面及びオンデマンドのハイブリッド方式で開催された。

### 1. 演題数

プレナリー講演 3 題

- 1) 山中伸弥教授（京都大学 iPS 細胞研究所：2012 年ノーベル生理学・医学賞受賞）

演題名：iPS 細胞研究の現状と医療応用に向けた取り組み

- 2) Svante Pääbo 教授（ドイツ・マックスプランク人類進化研究所・沖縄科学技術大学院大学：2022 年ノーベル生理学・医学賞受賞）

演題名：Archaic Genomic

- 3) Bente Pedersen 教授（デンマーク・コペンハーゲン大学）

演題名：Exercise as medicine in a translational perspective

萩原記念講演 1 題

田原記念講演 1 題

特別講演 4 題

シンポジウム 61 セッション（282 題）

そのうち 100 周年記念シンポジウムとして以下の 13 セッションが実施された。

恒常性と持続可能性～生理学の次なる 100 年に向けて～

社会性と神経科学

若者と考える科学・生理学の未来

分野横断型プロジェクトが牽引する科学の未来

pH が支える地球上の生命—地球環境がもたらした生命進化とその未来

AI 技術が切り開く医学・生理学・生命科学の新展開

脂質・脂質アナログによるチャネル分子機能の制御メカニズムとその生理学的な重要性

加齢に伴う生体機能低下と抗老化への多角的アプローチ

革新的脳研究—高次脳機能を担う神経回路の全容解明に向けて

未病の理解へ向けて：最先端数理科学からの挑戦

温度感受性 Transient Receptor Potential（TRP）チャネル研究に至る 40 年の歩みとこれからの展望

生理学教育の現在，過去，未来

個体レベルでの生命機能解析の新技術

教育講演 3 題

モデル講義 4 題

一般演題募集 732 題（採択 734 題のうち 2 題取り下げ）

※応募数：738 題（採択 734 題うち学部生 63 題，不採択 4 題）

## Late-breaking Abstracts (LBA)

応募数：95 題（採択数 95 題うち学部生 12 題）  
高校生発表 発表 38 題（15 校）87 名（うち動画発表 3 題）  
参加のみ：59 名，合計：146 名  
総演題数 1,163 題（単独大会としては過去最多）

## 2. 参加者

参加者総数は 2,244 名に達した。内訳は以下のとおりである。

種別	早期	後期・当日	合計
会員	875	198	1,073
非会員	103	165	268
大学院生	262	82	344
学部生	110	145	255
高校生	146	0	146
招待演者	158	0	158
合計	1,654	590	2,244

招待：158 名（PL3 名，SL4 名，非会員シンポジスト 151 名）

## 3. 表彰・受賞

Travel Award 応募数：5 件（採択 4 件，不採択 1 件）

Physiological Reports Poster Award（Open-access Journal “Physiological Reports” 主催）

対象演題：一般演題および LBA に応募した大学院生対象（192 題）。

希望演題：69 題

最終選考：6 題

授賞演題：2 題

学部生ポスター優秀賞

対象演題：75 題

最優秀演題賞：3 題

優秀演題賞：12 題

高校生発表優秀賞

対象演題：38 題

最優秀演題賞：2 題

優秀演題賞：8 題

## 4. 100 周年記念展示

京都国際会館エントランスにおいて，記念展示を実施した。

A0 パネル 24 枚，動画 3 点，機器・資料 10 点

## 5. オンデマンド配信

配信期間：2023 年 3 月 23 日（木）～4 月 17 日（月）



6. 託児所            募集期間：～2023年2月24日（金）
7. 式典            3月14日8時30分より第1会場において100周年記念式典が開催された。
8. 懇親会           COVID-19の感染蔓延状況により、開催しないこととした。  
代わりに3月14日にイベントホールにて鏡開き（生理学の日式典）を行った。
9. ノーベル賞受賞者対談  
プレナリー講演者の山中伸弥教授と Svante Pääbo 教授による対談が3月14日に開催された。

## 生理学研究に関する京都宣言

日本生理学会

生理学の歴史は、人体の構造と機能を明らかにしようとした多くの先人たちの努力によって作られてきました。その起源は紀元前にさかのぼります。そして近代から現代に到る生理学の中心となる概念は、19世紀半ばのクロード・ベルナールから20世紀初頭のキャノンによって形成された生体内部環境が組織液の循環等の要因によって外部から独立して恒常性を保っているとするホメオスタシスという考え方でした。それは20世紀における種々のホルモン分子や自律神経反射の発見につながりました。そして生理学研究の流れは、個々の臓器の機能を還元的に理解することに向かい、興奮性膜を形成するイオンチャネルの発見、膜受容体分子の解明、筋収縮のメカニズム解明、膜輸送機構の解明、神経回路の構造と機能の解明など、多くの成果を遂げ、医学・医療の発展に貢献してきました。その結果として、我々人類は健康な身体を獲得し、長寿を達成してきました。1922年に始まる日本の生理学の歴史はまさしくこのような生理学・生命科学の歴史とともにあり、日本人の研究者もその発展に大きく貢献してきました。このような輝かしい過去100年の歴史を振り返ったとき、私たち生理学者は次の100年に何を目指すべきかでしょうか？ひとつには、個々の臓器の機能の解明によって明らかになってきた様々な知見を今一度統合し、人体を種々の臓器が構成するネットワークとして考えていく必要があります。そのためには今一度ホメオスタシス（生体の恒常性）という生理学の原点に立ち返り、全身の機能をバランスの取れた形で維持し、生活の質の高い健康な長寿を実現していくための学問体系を再構築すべきでしょう。ただ、100年先を考えますと、それだけでは十分ではありません。地球環境は時々刻々と悪化しています。さらには2020年初頭から起きたコロナウィルスの世界的な感染拡大は人間社会が直面する種々の地球規模の問題をあぶり出しました。人類の健康と調和のとれた持続性のある社会を作っていくためには、我々人間は、個々の人間個体のホメオスタシスだけでなく、人間社会を構成する集団のホメオスタシス、さらには地球環境・宇宙環境のホメオスタシスを考えていく必要があります。そして、生命科学の発展に基づく医学・医療の恩恵を得て身体の新健康と長寿を実現しつつある我々は、これからどのように生き、人生を全うすべきかと言う新しい哲学・倫理の構築が必要となってくるでしょう。

私たち日本生理学会に集う生理学者は、学会創設100周年を迎えるにあたり、100年後の未来に向けて、人類がこのような地球・宇宙環境のホメオスタシスを深く理解し、調和と持続性ある社会を作っていくための礎となる科学的知見を提供し続けるための研究を真摯に行っていくことを誓います。

2023年3月

## Declaration of Kyoto on Physiology Research

The Physiological Society of Japan

The history of physiology is paved with the efforts of our predecessors, who have endeavored to elucidate the structure and function of the human body since before the time of Christ. A modern approach to physiology, “homeostasis”, was proposed by Claude Bernard in the mid-19<sup>th</sup> century, and Walter Cannon championed it into the 20<sup>th</sup> century. Homeostasis refers to the maintenance of stability of the inner environment of the body against changes in the external environment. This is accomplished by a variety of physiological mechanisms including the circulation of fluids in bodily tissue. Even early on, the homeostatic approach bore fruit, such as the discovery of various hormones and autonomic reflexes in the 20<sup>th</sup> century. Since then, the field of physiology has progressed to smaller scales, reductively elucidating the molecular and cellular mechanisms of individual organs. This has resulted in our discoveries of the ion channels of excitable membranes, membrane receptor and transporters, the mechanisms of muscle contraction, and the structure and function of the nervous system. These advances in basic physiology have directly contributed to advances in medicine, benefiting the human condition by enabling increased longevity and health. The Physiological Society of Japan, established in 1922, has grown alongside this magnificent history of physiology and life sciences. Looking back over the last 100 years of physiology, we must pose the question: what should we expect of the next 100 years? An obvious next step is to integrate our modern understanding of individual organs, which we have gained over the last century, into a complete understanding of how these organs form the network which is the human body. This requires us to again reflect on the concept of homeostasis: if we can develop methods to maintain the *balance* between the body’s various functions, we can enable long and high-quality lives. But, considering the changes likely to occur over the next 100 years, even this may not be enough. The environment of our planet is worsening every day. Furthermore, the global Covid-19 pandemic, stretching from early 2020, has revealed a number of world-wide problems faced by society. To establish a sustainable and well-harmonized society, we must consider not only the homeostasis of individual humans, but also the homeostasis of human society and that of our planet and universe. We must not be complacent now that we have achieved longevity and health. We must establish a new philosophy and ethics on how to live and die, to guide us into the next 100 years.

We, the physiologists of the Physiological Society of Japan, make this declaration upon the 100<sup>th</sup> anniversary year of our society. We declare that we will conduct basic research and produce scientific evidence to achieve deep understanding of the homeostasis of the Earth and universe, and found the basis for a harmonious and sustainable community over the next 100 years.

March, 2023

## 日本生理学会大会一覧

### 【第1回】

開催年月：1922年7月

開催地：東京

主管：東京帝国大学

当番幹事/会長：永井 潜，橋田邦彦

### 【第2回】

開催年月：1923年4月

開催地：福岡

主管：九州帝国大学

当番幹事/会長：石原 誠 板垣政参

### 【第3回】

開催年月：1924年7月

開催地：仙台

主管：東北帝国大学

当番幹事/会長：藤田敏彦，佐武安太郎

### 【第4回】

開催年月：1925年8月

開催地：奉天

主管：満洲医科大学

当番幹事/会長：久野 寧

### 【第5回】

開催年月：1926年4月

開催地：東京

主管：東京帝国大学

当番幹事/会長：永井 潜，橋田邦彦

### 【第6回】

開催年月：1927年4月

開催地：岡山

主管：岡山医科大学

当番幹事/会長：生沼曹六

### 【第7回】

開催年月：1928年4月

開催地：京都

主管：京都帝国大学

当番幹事/会長：石川日出鶴丸，正路倫之助

### 【第8回】

開催年月：1929年7月

開催地：札幌

主管：北海道帝国大学

当番幹事/会長：宮崎彪之助，朴沢 進

### 【第9回】

開催年月：1930年4月

開催地：大阪

主管：大阪医科大学

(大阪帝国大学設立は翌年の1931年)

当番幹事/会長：中川知一

### 【第10回】

開催年月：1931年3月

開催地：長崎

主管：九州帝国大学

当番幹事/会長：緒方大象

### 【第11回】

開催年月：1932年3月

開催地：新潟

主管：新潟医科大学

当番幹事/会長：横田武三

### 【第12回】

開催年月：1933年7月

開催地：金沢

主管：金沢医科大学

当番幹事/会長：上野一晴



**【第13回】**

開催年月：1934年4月

開催地：東京

主管：東京慈恵会医科大学

当番幹事/会長：浦本政三郎

**【第14回】**

開催年月：1935年10月

開催地：ソウル

主管：京城帝国大学

当番幹事/会長：中西政周，大塚藤吉

**【第15回】**

開催年月：1936年10月

開催地：倉敷

主管：労働科学研究所

当番幹事/会長：暉峻義等

**【第16回】**

開催年月：1937年4月

開催地：名古屋

主管：名古屋医科大学

当番幹事/会長：福田邦三

**【第17回】**

開催年月：1938年4月

開催地：京都

主管：京都帝国大学

当番幹事/会長：石川日出鶴丸，久野 寧，  
越智真一，正路倫之助，勝 義孝

**【第18回】**

開催年月：1939年4月

開催地：熊本

主管：熊本医科大学

当番幹事/会長：小玉作治

**【第19回】**

開催年月：1940年4月

開催地：千葉

主管：千葉医科大学

当番幹事/会長：鈴木正夫

**【第20回】**

開催年月：1941年7月

開催地：台北

主管：台北帝国大学

当番幹事/会長：細谷雄二，竹中繁雄

**【第21回】**

開催年月：1942年3月

開催地：東京

主管：慶應義塾大学

当番幹事/会長：加藤元一

**【第22回】**

開催年月：1943年3月

開催地：福岡

主管：九州帝国大学

当番幹事/会長：板垣政参，緒方大象

**【第23回】**

開催年月：1946年11月

開催地：仙台

主管：東北帝国大学

当番幹事/会長：佐武安太郎，本川弘一

**【第24回】**

開催年月：1947年4月

開催地：大阪

主管：大阪帝国大学（同年9月に改称）

当番幹事/会長：久保秀雄

**【第25回】**

開催年月：1948年5月

開催地：新潟

主管：新潟大学

当番幹事/会長：高木健太郎

**【第26回】**

開催年月：1949年4月

開催地：京都

主管：京都大学

当番幹事/会長：笹川久吾，大谷卓三

**【第27回】**

開催年月：1950年5月

開催地：呉

主管：広島大学

当番幹事/会長：西丸和義

**【第28回】**

開催年月：1951年4月

開催地：東京

主管：東京大学

当番幹事/会長：坂本嶋嶺，福田邦三

**【第29回】**

開催年月：1952年7月

開催地：札幌

主管：北海道大学

当番幹事/会長：簗島 高

**【第30回】**

開催年月：1953年4月

開催地：福岡

主管：九州大学

当番幹事/会長：瀬尾愛三郎

**【第31回】**

開催年月：1954年5月

開催地：名古屋

主管：名古屋大学

当番幹事/会長：久野 寧，伊藤 龍

**【第32回】**

開催年月：1955年4月

開催地：京都

主管：京都大学

当番幹事/会長：笹川久吾，大谷卓三

**【第33回】**

開催年月：1956年5月

開催地：岡山

主管：岡山大学

当番幹事/会長：林 香苗，福原 武

**【第34回】**

開催年月：1957年5月

開催地：神戸

主管：神戸大学

当番幹事/会長：正路倫之助，須田 勇，古沢一夫

**【第35回】**

開催年月：1958年5月

開催地：金沢

主管：金沢大学

当番幹事/会長：斎藤幸一郎，岩間吉也

**【第36回】**

開催年月：1959年3月

開催地：東京

主管：日本医科大学

当番幹事/会長：戸塚武彦

**【第37回】**

開催年月：1960年4月

開催地：徳島

主管：徳島大学

当番幹事/会長：丘 芳包，山野俊雄

**【第38回】**

開催年月：1961年4月

開催地：京都

主管：京都府立医科大学

当番幹事/会長：吉村寿人，岩瀬善彦

**【第39回】**

開催年月：1962年7月

開催地：弘前

主管：弘前大学

当番幹事/会長：佐藤 熙，中村 勉

**【第40回】**

開催年月：1963年4月

開催地：大阪

主管：大阪大学

当番幹事/会長：久保秀雄，吉井直三郎

**【第41回】**

開催年月：1964年4月

開催地：千葉

主管：千葉大学

当番幹事/会長：鈴木正夫，福田篤郎

**【第42回】**

開催年月：1965年5月

開催地：岐阜

主管：岐阜大学

当番幹事/会長：竹中繁雄，田村喜弘

**【第43回】**

開催年月：1966年5月

開催地：松本

主管：信州大学

当番幹事/会長：和合卯太郎，宮川 清

**【第44回】**

開催年月：1967年3月

開催地：名古屋

主管：名古屋大学

当番幹事/会長：伊藤 龍，高木健太郎

**【第45回】**

開催年月：1968年4月

開催地：熊本

主管：熊本大学

当番幹事/会長：緒方維弘，佐藤昌康，田中育郎

**【第46回】**

開催年月：1969年4月

開催地：米子

主管：鳥取大学

当番幹事/会長：山田 守，及川俊彦

**【第47回】**

開催年月：1970年4月

開催地：東京

主管：昭和大学

当番幹事/会長：井上清恒，市川三太，竹重千冬

**【第48回】**

開催年月：1971年4月

開催地：東京

主管：東京医科歯科大学

当番幹事/会長：勝木保次，市岡正道，村田計一，  
渡辺 昭

**【第49回】**

開催年月：1972年5月

開催地：盛岡

主管：岩手医科大学

当番幹事/会長：三田俊定，八木舎四，高木弘夫

**【第50回】**

開催年月：1973年4月

開催地：福岡

主管：九州大学

当番幹事/会長：問田直幹，後藤昌義，栗山 熙，  
桑原万寿太郎

**【第51回】**

開催年月：1974年6月

開催地：札幌

主管：北海道大学

当番幹事/会長：伊藤真次，藤森聞一，中村治雄

**【第52回】**

開催年月：1975年4月

開催地：津

主管：三重大学

当番幹事/会長：勝田 穰，村上長雄

**【第53回】**

開催年月：1976年4月

開催地：仙台

主管：東北大学

当番幹事/会長：鈴木泰三，青木 健，中浜 博，  
田崎京三，星 猛

**【第54回】**

開催年月：1977年4月

開催地：鹿児島

主管：鹿児島大学

当番幹事/会長：松本保久，橋村三郎，笹原泰夫

**【第55回】**

開催年月：1978年4月

開催地：新潟

主管：新潟大学

当番幹事/会長：小林庄一，村上秀樹，新島 旭，  
丸山直滋，島田久八郎

**【第56回】**

開催年月：1979年4月

開催地：東京

主管：東京慈恵会医科大学

当番幹事/会長：増田 充，酒井敏夫

**【第57回】**

開催年月：1980年4月

開催地：神戸

主管：神戸大学

当番幹事/会長：須田 勇，岡本彰祐，塙 功

**【第58回】**

開催年月：1981年4月

開催地：徳島

主管：徳島大学

当番幹事/会長：松本淳次，井上五郎，高田 充

**【第59回】**

開催年月：1982年4月

開催地：横浜

主管：慶應義塾大学

当番幹事/会長：塚田裕三，村上元彦

**【第60回】**

開催年月：1983年4月

開催地：大阪

主管：大阪大学

当番幹事/会長：岩間吉也，中馬一郎，中山昭雄，  
河村洋二郎

**【第61回】**

開催年月：1984年3月

開催地：前橋

主管：群馬大学

当番幹事/会長：高木貞定，三浦光彦，平尾武久，  
鈴木光雄

**【第62回】**

開催年月：1985年3月

開催地：久留米

主管：久留米大学

当番幹事/会長：瀬瀬教三，西彰五郎

**【第63回】**

開催年月：1986年4月

開催地：山形

主管：山形大学

当番幹事/会長：望月政司，加藤宏司

**【第64回】**

開催年月：1987年4月

開催地：千葉

主管：千葉大学

当番幹事/会長：本間三郎，本田良行



**【第 65 回】**

開催年月：1988 年 4 月

開催地：和歌山

主管：和歌山県立医科大学

当番幹事/会長：松下 宏，辻本 毅，辻 繁勝

**【第 66 回】**

開催年月：1989 年 4 月

開催地：岡山

主管：岡山大学

当番幹事/会長：中山 沃，堀 泰雄，足立 明

**【第 67 回】**

開催年月：1990 年 4 月

開催地：宮崎

主管：宮崎医科大学

当番幹事/会長：石原延貞，美原 恒

**【第 68 回】**

開催年月：1991 年 3 月

開催地：京都

主管：大阪医科大学

当番幹事/会長：藤本 守，今井雄介

**【第 69 回】**

開催年月：1992 年 4 月

開催地：秋田

主管：秋田大学

当番幹事/会長：小川哲朗，古谷野速雄

**【第 70 回】**

開催年月：1993 年 4 月

開催地：甲府

主管：山梨医科大学

当番幹事/会長：入來正躬，竹内 亨

**【第 71 回】**

開催年月：1994 年 3 月

開催地：高松

主管：香川医科大学

当番幹事/会長：畠瀬 治，細見 弘，村上哲英

**【第 72 回】**

開催年月：1995 年 3 月

開催地：名古屋

主管：名古屋大学

当番幹事/会長：富田忠雄，曾我部正博，渡邊 悟，  
熊澤孝朗

**【第 73 回】**

開催年月：1996 年 4 月

開催地：福井

主管：福井医科大学

当番幹事/会長：岡 弘，根来英雄

**【第 74 回】**

開催年月：1997 年 3 月

開催地：浜松

主管：浜松医科大学

当番幹事/会長：森田之大，高田明和，寺川 進

**【第 75 回】**

開催年月：1998 年 3 月

開催地：金沢

主管：金沢大学

当番幹事/会長：永坂鉄夫，東田陽博，加藤 聖

**【第 76 回】**

開催年月：1999 年 3 月

開催地：長崎

主管：長崎大学

当番幹事/会長：小坂光男，佐藤俊英，相川忠臣，  
松田好弘

**【第 77 回】**

開催年月：2000 年 3 月

開催地：横浜

主管：慶應義塾大学

当番幹事/会長：植村慶一，金子章道

**【第78回】**

開催年月：2001年3月

開催地：京都

主管：京都大学

当番幹事/会長：川口三郎，大森治紀，野間明典，  
平野丈夫

**【第79回】**

開催年月：2002年3月

開催地：広島

主管：広島大学

当番幹事/会長：瀬山一正，緒方宣邦，司馬芳樹，  
松川寛二

**【第80回】**

開催年月：2003年3月

開催地：福岡

主管：福岡大学

当番幹事/会長：今永一成，河田 博

備考：第76回日本薬理学会年会と同一会期・  
会場で実施

**【第81回】**

開催年月：2004年6月

開催地：札幌

主管：札幌医科大学，北海道大学

当番幹事/会長：青木 藩，當瀬則嗣，本間研一，  
福島菊郎

**【第82回】**

開催年月：2005年5月

開催地：仙台

主管：東北大学

当番幹事/会長：丹治 順

**【第83回】**

開催年月：2006年3月

開催地：前橋

主管：群馬大学

当番幹事/会長：小澤瀨司

**【第84回】**

開催年月：2007年3月

開催地：大阪

主管：大阪大学

当番幹事/会長：山本 隆

**【第85回】**

開催年月：2008年3月

開催地：東京

主管：日本医科大学

当番幹事/会長：佐久間康夫

**【第86回】**

開催年月：2009年7，8月

開催地：京都

主管：京都府立医科大学

当番幹事/会長：丸中良典

備考：IUPS2009（国際生理学会第36回世界  
大会；会長・宮下保司）と同時開催

**【第87回】**

開催年月：2010年5月

開催地：岩手

主管：岩手医科大学

当番幹事/会長：佐々木和彦

**【第88回】**

開催年月：2011年3月

開催地：横浜

主管：東京慈恵会医科大学，昭和大学，  
東邦大学，東京医科大学

当番幹事/会長：栗原 敏，竹森 重，本間生夫，  
久光 正，高松 研，有田秀穂，  
小西真人，金子清俊

備考：誌上開催（第116回日本解剖学会総会  
全国学術集会和共同開催）：東日本大  
震災による

**【第 89 回】**

開催年月：2012 年 3 月  
開催地：松本  
主 管：信州大学  
当番幹事/会長：大橋俊夫

**【第 90 回】**

開催年月：2013 年 3 月  
開催地：東京  
主 管：横浜市立大学  
当番幹事/会長：石川義弘

**【第 91 回】**

開催年月：2014 年 3 月  
開催地：鹿児島  
主 管：鹿児島大学  
当番幹事/会長：亀山正樹

**【第 92 回】**

開催年月：2015 年 3 月  
開催地：神戸  
主 管：大阪大学  
当番幹事/会長：岡村康司  
備 考：第 120 回日本解剖学会総会・全国学術  
集会との合同大会

**【第 93 回】**

開催年月：2016 年 3 月  
開催地：札幌  
主 管：旭川医科大学，札幌医科大学  
当番幹事/会長：高井 章，當瀬則嗣

**【第 94 回】**

開催年月：2017 年 3 月  
開催地：浜松  
主 管：浜松医科大学  
当番幹事/会長：浦野哲盟，福田敦夫

**【第 95 回】**

開催年月：2018 年 3 月  
開催地：香川  
主 管：香川大学  
当番幹事/会長：徳田雅明，平野勝也

**【第 96 回】**

開催年月：2019 年 3 月  
開催地：神戸  
主 管：生理学研究所  
当番幹事/会長：富永真琴  
備 考：第 9 回アジア・オセアニア生理学会連  
合大会（FAOPS2019；会長・鍋倉淳  
一）との合同大会

**【第 97 回】**

開催年月：2020 年 3 月  
開催地：別府  
主 管：大分大学  
当番幹事/会長：小野克重，花田礼子  
備 考：誌上開催；新型コロナウイルス感染  
拡大防止のため

**【第 98 回】**

開催年月：2021 年 3 月  
開催地：名古屋  
主 管：名古屋市立大学  
当番幹事/会長：飛田秀樹，橋谷 光  
備 考：オンライン開催（第 126 回日本解剖学  
会総会との合同大会）；新型コロナウ  
イルス感染拡大防止のため

**【第 99 回】**

開催年月：2022 年 3 月  
開催地：仙台  
主 管：東北大学，山形大学  
当番幹事/会長：虫明 元，藤井 聡  
備 考：対面及びオンライン開催併用；新型コ  
ロナウイルス感染拡大防止のため

**【第 100 回】**

開催年月：2023 年 3 月

開催地：京都

主管：京都大学

当番幹事/会長：伊佐 正



## 大会参加者数と演題数の推移

西暦	和暦	開催回数	参加者	演題数
1922	大正 11	1		37
1923	大正 12	2		59
1924	大正 13	3		98
1925	大正 14	4		103
1926	大正 15 / 昭和元	5		86
1927	昭和 2	6		146
1928	昭和 3	7		144
1929	昭和 4	8		121
1930	昭和 5	9		115
1931	昭和 6	10		136
1932	昭和 7	11		138
1933	昭和 8	12		206
1934	昭和 9	13		163
1935	昭和 10	14		186
1936	昭和 11	15		211
1937	昭和 12	16		154
1938	昭和 13	17		222
1939	昭和 14	18		195
1940	昭和 15	19		118
1941	昭和 16	20		222
1942	昭和 17	21		133
1943	昭和 18	22		162
1944	昭和 19	開催中止		
1945	昭和 20	開催中止		
1946	昭和 21	23		42
1947	昭和 22	24		101
1948	昭和 23	25		180
1949	昭和 24	26		194
1950	昭和 25	27		346
1951	昭和 26	28		337
1952	昭和 27	29		388
1953	昭和 28	30		397
1954	昭和 29	31		233
1955	昭和 30	32		329
1956	昭和 31	33		234
1957	昭和 32	34		369
1958	昭和 33	35		388
1959	昭和 34	36		252
1960	昭和 35	37		292
1961	昭和 36	38		202

西暦	和暦	開催回数	参加者	演題数
1962	昭和 37	39		253
1963	昭和 38	40		145
1964	昭和 39	41		174
1965	昭和 40	42		253
1966	昭和 41	43		275
1967	昭和 42	44		277
1968	昭和 43	45		363
1969	昭和 44	46		294
1970	昭和 45	47		278
1971	昭和 46	48	1,012	281
1972	昭和 47	49	1,055	362
1973	昭和 48	50	1,170	399
1974	昭和 49	51	1,357	412
1975	昭和 50	52	1,192	402
1976	昭和 51	53	1,324	465
1977	昭和 52	54	1,186	458
1978	昭和 53	55	1,267	476
1979	昭和 54	56	1,393	460
1980	昭和 55	57	1,400	473
1981	昭和 56	58	1,600	505
1982	昭和 57	59	1,569	702
1983	昭和 58	60	1,471	666
1984	昭和 59	61	1,400	735
1985	昭和 60	62	1,502	742
1986	昭和 61	63	1,400	824
1987	昭和 62	64	1,627	815
1988	昭和 63	65	1,604	819
1989	昭和 64 / 平成元	66	1,686	863
1990	平成 2	67	1,434	863
1991	平成 3	68	1,566	878
1992	平成 4	69	1,450	817
1993	平成 5	70	1,701	963
1994	平成 6	71	1,805	898
1995	平成 7	72	1,652	787
1996	平成 8	73	1,676	896
1997	平成 9	74	1,806	963
1998	平成 10	75	1,687	855
1999	平成 11	76	1,700	970
2000	平成 12	77	1,785	822
2001	平成 13	78	2,058	1,035

西暦	和暦	開催 回数	参加者	演題数	備考
2002	平成 14	79	1,669	1,000	
2003	平成 15	80	4,292	915	
2004	平成 16	81	1,359	924	
2005	平成 17	82	1,495	866	
2006	平成 18	83	1,527	868	
2007	平成 19	84	1,600	883	
2008	平成 20	85		813	
2009	平成 21	86	3,500	3,172	IUPS2009 と同時開催
2010	平成 22	87	1,214	721	
2011	平成 23	88	2,213	1,174	誌上開催
2012	平成 24	89		861	
2013	平成 25	90	1,800	960	
2014	平成 26	91	1,521	942	
2015	平成 27	92	3,066	1,649	
2016	平成 28	93	1,528	927	
2017	平成 29	94	1,606	900	
2018	平成 30	95	1,603	881	
2019	平成 31 / 令和元	96	2,551		FAOPS2019 と同時開催
2020	令和 2	97	1,600	668	誌上開催
2021	令和 3	98	2,099	632	オンライン開催
2022	令和 4	99			ハイブリッド開催
2023	令和 5	100	2,244	1,125	100 回記念大会

編集兼  
発行人  
一般社団法人日本生理学会  
編集・広報委員会  
代表  
花田礼子

印刷者  
印刷所  
〒114-0004  
東京都北区西ヶ原3-46-10  
株式会社杏林舎  
渡邊裕介

発行所  
〒160-0016  
東京都新宿区信濃町35-信濃町煉瓦館5F  
（一財）国際医学情報センター内  
一般社団法人日本生理学会

TEL  
FAX  
03-5533-1177  
03-5533-4027  
03-5533-3971  
振替  
0012016374337  
定価  
¥2200